平成29年10月1日発行第14巻第5号通巻109号

cover illustration by ぽっしぃ

ドリームマガジン

2D DREAM MAGAZINE

2017 10 Volume.96 DIGITAL EDITION

夏限定 32ページ増量 特大号!

18 未満

カラーピンナップ COLOR PINUP

しーあーる ぽっしぃ

【表紙&ピンナップテレホンカード応募者全員サービス】

今号の Special Fetishism Series 特集

ふたなり

雄々しき男根を生やした可憐なヒロインは男の悦びに溺れ堕ちていく――

新連載

catwalkNEROの新作美少女ゲームが連載小説化!

アナスタシアと7人の姫女神

淫紋の烙印

原作:桜沢大 小説:筑摩十幸

挿絵:くろいわしんじ

【連載&読み切り小説】

大人気小説の外伝が登場!

『呪詛喰らい師』

蒼井村正×或十せねか

有機企画×緑木邑

酒井仁×桐島サトシ

桃生雨京×ぽんすけ

089タロー×しーあーる

黒井鵜×俄雨

冬野ひつじ×はらいた

【えっちマンガ】

話題のふたなり小説がコミカライズ!

『天煌聖姫ヴァーミリオン』

火愚夜

楠木りん

ばふぇ

ふみひろ

尻戦車

試し読み版

ペニスを容赦なく触手責めされ、
悶絶してしまうふたなりくノ一!!
抜け忍ハッキ
ふたなりくノ一の法廷
小説 NOVEL 狩野景
挿絵 ILLUSTRATION ぼっしい

「ふん、まだ追ってくるか、しつこいな」
鬱蒼とした森の中、ハヅキは数刻前から一定の距離を保ってついてくる気配に苛立ちを覚えていた。
目にも留まらぬ速さで木から木へと飛び移り、移動を続ける。
引き離そうと速度を上げると、遅れもせず合わせてくる所から見て、実力はそれなりにあるらしい。
「面倒くさい、片を付けてやる」
後ろで纏めた紫の髪を翻し、木の枝から空中に躍り出た。素早く前転し、音もなく地面に降り立つ。
凜とした眼差しの、気が強そうな美貌。
腰を落として構えるその肉体は十分に鍛え上げられ、牝鹿のような躍動感に満ちていた。
張りのある美巨乳と、引き締まった尻を浮き立たせる、密着度が高い忍び装束を纏う。
裸身が容易に想像できるほど身体の線を露わにさせたその姿は、敵が男であればどのような堅物であろうとも心乱される魅惑に満ちていた。
しかしその股間には、女の身に存在するはずのない立派な逸物が隆々と形を浮き出させていた。
そのふたなりくノ一の前に、もう一人、女の忍びが降り立つ。
「どうやら観念したようね、抜け忍ハヅキ。我ら魔轟羅衆を抜けて逃げおおせるなんて、不可能だとようやく悟ったのかしら？」
緑の髪を艶やかに結い上げたそのくノ一は、ハヅキよりも豊満な身体をやはりピッタリとした忍び装束に包んでいた。
だがその股間に男の逸物はなく、ぷっくりとした恥丘の膨らみが浮き立ち割れ目のスジが食い込む。
「鬱陶しい気配がいつまでもついてくると思ったら、フミヅキか。邪魔をするな、失せろ、お前では私に勝てない」
表情一つ変えず言い放つハヅキに、フミヅキの妖艶な美貌が殺意を帯びる。
「相変わらず上からの態度ね。抜け忍風情がいつまで上忍気分なのかしら？　あなたの働きなんか、もうとうに私が追い抜かしたのに」
毒蛇を思わせる眼差しを瞳に宿しながら、忌々しげにフミヅキが嘲ってくる。しかしハヅキは意に介した様子もなかった。
「そのように感情を剥き出しにしているようでは、働きも寝所での騙し討ちがせいぜいだろう。ともかく、まだ私を追うというのなら斬る」
そんな淡々とした受け答えが、余計にフミヅキの感情を逆撫でしていた。
「私に土下座して許しを乞うなら、助命の口添えをしてあげてもいいって思ってたのに……。あんたの息の根を私の手で止めて、魔轟羅様から賜ったその逸物、私のものにしてあげるわ！」
憤怒を酷薄な笑みに表して、フミヅキが襲いかかった。抜き打ちに迫る刃を、忍び刀でハヅキが易々と受ける。二手三手と刃を繰り出し合い、鋼と鋼がぶつかる剣呑な音色が木々の狭間に響く。
「遅い。それに相変わらず太刀筋が単調」
剣圧に耐えかねて飛び退いたフミヅキに言う。
互いに決定打はなかったが、全く無傷のハヅキに比べてフミヅキにはいくつもの浅い切り傷が刻まれていた。ハヅキの身体に飛び散るのはその返り血だ。
しかしフミヅキは不敵な笑みを浮かべる。
「剣の腕前は流石だけれど、もうそんなに息を切らして。逃亡生活の疲れが出たのかしら？」
手傷を負っていながらフミヅキは息一つ乱していないというのに、ハヅキは既に肩を上下させて荒い呼吸を繰り返している。だがそれは決して疲労などではなかった。
（まずいな……、やはり戦いになると、男の部分がかなり擦れる……）
原因は股間の逸物であった。ただ移動しているときはさほど気にならないが、戦いの複雑な身のこなしになると、太く大きなその部分が密着度の高い衣服と擦れて悩ましい刺激が生じてしまうのだ。
（このようなもの……いまの私には不必要なのに）
任務のために組織の首領である魔轟羅によって植え付けられた男性器。その任務を放棄し、組織を離れたいまでは捨て去りたいのだけれど、自分の手で外すことは不可能だった。
「次は、本気でいくぞ……」
疼きがこれ以上強くならない内に一気に倒してしまおう。クナイを投擲しながら距離を詰め、フミヅキの心臓目掛けて忍び刀を繰り出す。
「く……っ、なんだ？　この匂い……ッ」
しかし思うように力が入らず、攻撃は全てかわされてしまった。
「やっぱりオチンポが付いていると、この香りも効くみたいね？　どんな堅物でもメロメロになる催淫香をここら一帯にまかせて貰ったわ。疼きが凄くて力が入らないでしょう？」
「催淫香……だと？」
魅惑の美貌と肉体を武器に男をたらし込み、交わりの最中の暗殺を得意とするフミヅキの術中にはまってしまった。
（はぁ……あぁ……逸物が……。それに、フミヅキの、身体……）
同じようにこの甘ったるい匂いの中にいるのに、フミヅキは何も影響を受けていない。しかしハヅキの男根は、次第に脈打ちが勢いづいて狂おしい疼痛を覚えていた。しかも同性であるフミヅキの装束から溢れそうなほどの撓わな乳房や、ムッチリと肉感的な尻に目を奪われる。
（男の部分が、奴の身体を求めてる……）
艶めかしい身のこなしに撓わな膨らみが揺れて拉

著者近況
TS至上主義の私としては、ふたなりは似て非なるものとして、勝手に敵意すら感じていたのですが……。どうしよう、書いてて楽しかったぁ。新たな性癖に目覚めちゃうぅ～。（ビクンビクン）

げると、陰茎の疼きが酷くなって何度も生唾を飲み込んでしまう。

「あはぁ、ピクンピクン脈打ちっ放しね、そのオチンポぉ。私の中に入りたがってるんじゃないかしらぁ？　いいわよ～、いらっしゃい。気持ちいい穴でたっぷりと面倒みてあげるわ～」

自ら乳房を揉みしだきながら、割れ目のスジをことさら強調するように腰を迫り出して、フミヅキが誘ってくる。途端に男根が反応して、じゅわんと先走りの汁が滲み出た。いっそこのまま誘いに乗って、返り討ちにしてやろうかという考えが頭をよぎる。恐るべき絶倫振りで敵のくノ一を堕とすのは、この逸物に備わった力の一つだ。

（いや、だめだ……。こんな忌まわしい感覚に、身を委ねるなんて……ッ）

男根を与えられたときからずっと馴染めずにいる。快感を覚えるほど嫌悪が高まる行為など、もう二度としたくない。

「浅ましい牝狐め。どれだけこの逸物が疼いても、お前の汚らわしい誘いになど乗ってやるものかっ」

気を緩めれば色欲に流されてしまいそうな陰茎の滾りに理性を振り絞って、萎えることを知らないその力を、全身に走る気脈へと注ぎ込む。

「くぅ……ふ……あはぁ……」

「あはぁ、そんな悩ましげな顔をして……。やせ我慢せずに私の中へいらっしゃい。さあ……」

情欲が全身に広がって、先走りの染みを広げながら男根の脈打ちが活発になる。甘く響くフミヅキの誘惑に昂る衝動を抑えて、心中に燃え盛る闘気へと気脈を駆け巡る力を繋げた。

「はぁああっ！」

爆発的に膨れ上がった力で地面を蹴る。

ドンと重々しい響きと共に、フミヅキ目掛けて跳んだ。慌てて彼女が構えを取ろうとするが、その動きがやたらと緩慢に見える。忍び刀を抜きざまに、フミヅキの首筋目掛けて振り抜く。

「そん……な……、速……すぎる……」

ろくに反応もできぬまま、切り裂かれた頸動脈から血の華を散らして妖艶なくノ一が倒れ伏した。

肉体能力の強化。これこそが、植え付けられた逸物に備わった一番の能力だった。

「魔轟羅から知らされていなかったようだな」

フミヅキは絶倫の逸物としての能力しか、知らなかったに違いない。あれだけ誘ってきたことからして、そちらの備えはできていたのだろう。全く反撃できず破れた色事専門くノ一を一瞥する。

「そやつでは、逸物を手に入れても、情欲に飲まれて使いこなすことは敵わなかっただろうな」

「――!!　魔轟羅っ!?」

突然耳元で囁かれて、慌てて跳びすさった。

忍び刀を逆手に握り身構える。

しかし声の主の姿はそこにない。ただ禍々しい気配が濃密になってゆく。

「そこかっ！」

その瘴気を溢れさせているフミヅキの骸へと、クナイを投げ放った。命中の寸前、その刃を指先で受け止め、虚ろな表情の亡骸が跳ね起きる。

「悪趣味なことを……、姿を現せ、魔轟羅っ！」

そりの合わない女だったが、正々堂々と挑んできてそれを打ち倒した。死者を、それも己の手下を冒瀆するかつての主にハヅキが憤る。

「死して無様に亡骸を晒す未熟な忍びに同情か。やはり甘い性根をしているなハヅキよ」

フミヅキの魅惑的な肢体が膨れ上がり爆散した。

「貴様っ！　魔轟羅っ」

飛び散る肉片と血煙の中から、毒蛇の目をした禿頭の巨漢が現れた。

国中の英傑が覇を競う世に暗躍し、汚れ仕事を請け負う忍軍魔轟羅衆の首領、魔轟羅その人であった。

「しかし逸物の情動を抑え力へと転化させる胆力と、殺ると決めれば心揺るがぬその非情さ。やはり抜け忍として屠るには惜しい」

「私の信念に従ったまでだ」

主からのまやかしの言葉に流されなかったからこそ、その心の強さを得られた。

「戻れハヅキ。儂の下で再び働きをするならば、逃亡の罪は不問にしてやろう」

「お前の下になど戻る気はさらさらないっ」

即答の拒絶を叩き付ける。

「世のため太平のためと信じてお前に従い、天下に仇成す者たちを葬ってきた結果が、さらなる詐いと混乱だ。私はこのような世界を作るために、忍びになったのではないっ」

厳しい修行に耐えた日々も、世のためと信じて人々を殺めた日々も、全て無駄だった。もう二度と忌まわしい行いに手を貸したくない。

「乱世あってこその我ら忍び。人の血肉こそが我らの糧であろう？　己の手によって人が息絶える。その甘露をお前も味わったのではないか？　ハヅキよ。さあ、儂の下へ返れ。儂の手足となって乱世を血色に染め上げるのだっ」

「完全にいかれている……っ」

魔轟羅の言葉に、胸が嫌悪でいっぱいになった。

「もう二度と関わらない気持ちで抜けたが、気が変わった。私の手で魔轟羅衆諸共お前を葬ってやる」

魔轟羅から逃れることを考えて退路を探っていたが、攻撃に思考を切り替えた。

「そうか……それは残念だな。ではお前の血肉も、我らの糧として食らい尽くすことにしてやろう」

魔轟羅が背中の鞘から、長刀を抜き放つ。

「く……ん……ふぁ、はぁあぁっ!!」

素の実力では魔轟羅の剣技には敵わない。自ら男

著者近刊　『目覚めると従姉妹を護る美少女剣士になっていた1～5巻』『目覚めると拳銃乙女を護る美少女拳士になっていた』『わたしのおっぱい育ててよ！　幼馴染みとお嬢様の育乳バトル』『イチャラブ痴漢電車　間違えて乗った女性専用車両は痴漢OK!?』ほか
好評発売中！

catwalkNEROと筑摩十幸の
最強タッグが再びニジマガに登場!!

アナスタシアと7人の姫女神(ひめがみ)

淫紋の烙印

第1話

亜人の男に淫紋を刻まれ
気高き女神は
処女と信念を砕かれる……

小説(NOVEL)／筑摩十幸(ちくまじゅうこう)
挿絵(ILLUSTRATION)／くろいわしんじ
原作／桜沢大(さくらざわひろ)

大いなる世界樹ユグドラシルが世界を支配した時代。
二千年周期の後期、神々と巨人、そして人が最も栄えた時代。
惑星アースは、かつてない繁栄の煌めきで宇宙の闇すらも払拭せんばかりだった。
だが――――！
盛者必衰のサダメからは神すらも逃れられないのか。黄金の輝きを放った華もやがては落花し、命を終えるときが来る。大いなる黄昏の刻が、今、邪悪なる胎動と共に近づきつつあった！
「ウオオオッ！　アスガルドのクズ神共、今日こそ積もりに積もった恨みを晴らさせてもらうぜっ」
「ユグドラシルは俺たちのものだぁ」
荒れ狂う海に浮かぶ巨大な軍船の群れ。その数は百隻はくだらないだろう。そこから巨人兵たちが一斉に海に飛び込み、岸に向かって進軍を開始した。
巨人族は人間の十倍ほどの巨躯を誇る。押し寄せる波をものともせずに突き進む様は、生きた津波といった感じだ。
「おのれ巨人共、いつの間に⁉」
「やつらをアスガルドに近づけるな！　撃て、撃てぇ！」
海岸には堅牢な砦が作られており、そこから盛んに砲撃が行われるが、屈強な肉体を持つ巨人にはほとんど効果がない。
「フハハっ！　お前らみたいなカスにこのロキ様を止められるかよぉ」
その兵団を率いていると思われる男が声高に叫んだ。その名はロキ。
派手な鎧でいきがってみせるものの、頑健な巨人族の中において、ロキだけは貧相な身体つきであまり強そうに見えない。手足は細く全体的に痩せているくせに、腹だけは無様に出ている。ただ大きくなっただけの中年男といった風体がなんとも不格好だ。
「くそ、ロキだ。あいつを狙え！」
「守りの弱いここを狙うとは、裏切り者め、死ね！」
ドンッ！　ドンッ！　ドンッ！　ドンッ！　ドドンッ！
そのロキに向けて集中砲火が開始された。ロキはかつてアスガルドに属していたが、度重なる悪事で追放され、今は宿敵である巨人族に寝返ったのだ。そのぶんアスガルド兵からも怒りを買っていた。
「う、うおっ！　あぶねぇ！　ちくしょぉぉっ！　こうなったら容赦しねぇ！　出でよ、魔獣ども！」
ドドドドドドドドッ！
ロキの呼びかけに答え、群青の水面を押し分けて、二頭の巨獣が海中から出現した。
一頭は黒光りする鱗に覆われた長い胴体をくねらせる大蛇で、胴回りは丸太を数十本束ねたほど太く、体長はその大半を海中に没しているが一里にも達するだろう。
そしてもう一頭は、燃え盛る炎のようなたてがみを持つ狼だ。ぎらりと光る銀色の牙は鋼を易々と噛み砕き切り裂きそうなほど鋭く、おそらく象でさえも一呑みできてしまうのではないだろうか。
「あ、あれは……魔狼フェンリルと……だ、大蛇ヨルムンガンドじゃないか……⁉」
神兵たちの間に戦慄が走る。彼らはこれまでも多くの神族を屠ってきた、最大最強の魔獣なのだ。数年前の闘いで葬り去られたはずだが、まさか復活していたとは。
「今日でお前らはおしまいだっ！　やっちまえ！」
「キシャアアァァッ！」
二頭の魔獣が同時に炎を吐き出す！二本の火柱が絡み合いながら、超高熱の矢となって砦に突き刺さった。
ドッゴォォォンッッ！
大地を揺るがすほどの大爆発が起こり、火山が噴火したような黒煙が雲を突き抜けるほど高く、濛々と上がる。
「く……なんて火力だ……」
「これ以上は、もたないぞ……」
神聖なる力に守られている砦であったが、城壁はぼろぼろにひび割れ、崩壊寸前だ。神兵たちは青ざめ、目前に迫った死の恐怖に震え上がった。
「ガハハッ！　そぉれ、もう一発だぁ！」
再びヨルムンガンドとフェンリルが攻撃の態勢に入る。大きく開かれた口から、赤い炎の塊がゴォォッと吐き出される。
「させませんっ！」
バッキィ――――――――ンッ！
そのとき、神々しい光の壁が砦の前に立ち現れ、炎を弾き返した。
「グギャアァァアアッ！」
跳ね返された火の玉はそのまま二頭の魔獣を直撃、灼熱の爆炎がヨルムンガンドとフェンリルの頭を吹き飛ばす。
ズドォォォンッ！
魔獣の身体は大爆発を起こし、真っ白な水蒸気が霧のように拡がった。
「た、助かった……のか？」
「ぬう、あの二頭が一瞬で……何事だ」
敵も味方も、何が起こったのかわからず一瞬呆気にとられる。
やがて濃密な霧のベールを押し開けて、輝かしい一筋の光が現れる。その中心には美しい少女神の姿があった。
「邪悪なる巨人たちよ。これ以上アスガルドの地を穢すことは、このブリュンヒルデが許しませんっ。今すぐ呪われし北の大地に帰りなさいっ」
風にたなびく優美な金髪、サファイアのような碧眼は美しくも鋭い光を放って、自分の何倍もある巨人の男たちを怯ませる。スッと通った鼻筋や柔らかな曲線を描く眉からは、おそらくこの世に生を受けた時から身についていたであろう高貴な血筋と精神性が垣間見える。桜の花弁のように可憐な唇は、峻厳な言葉を放ち、その女神がただ美しいだけの存在ではないことを物語っていた。

「オオオ……あれが、アスガルドの女神、ブリュンヒルデか」
「噂通りの霊圧……眩しいくらいだぜ」
そこから先へは一歩も進ませないという絶対の意志が、見えない壁となって巨人たちを押し返す。それまで神軍を圧倒していた巨人の軍勢が、たった一人の女神によって立ち往生していた。
「ぬう……貴様っ！」
ロキの血走った眼球が、ギロリと空の一点を睨む。
その実力は最高神オーディンをも超えると言われる、神聖アスガルド王国軍最強女神の一人。悪を断罪する神剣『フォルセティ』は、法と秩序を愛する彼女の正義の心を象徴する神器である。同時にその美しさにおいても並ぶものなしと言われ、敵対する巨人族ですら見とれてしまい、闘いを中断してしまったという逸話が残るほどだ。
「ブリュンヒルデェェッ！」
ロキの醜い表情に、それまで以上の憎悪が色濃く浮かび上がる。こめかみの血管が脈動し、今にも血を噴き出しそうだ。
「静まりなさいロキ！　かつては私たちの同胞だったというのに、おぞましい巨人の力を借り、アスガルドに刃を向けるなど……なんて愚かなことでしょう。あなたにはプライドというものがないのですか」
透き通る美声は暴風の中でも鼓膜に届く。厳しい口調の中に凛とした高貴さが、聞く者の魂を揺さぶらずにおかない。
「く、くそ……またお説教かよ。昔からお前はそうだった。くそまじめで、お高くとまって、いつもいつも俺を馬鹿にしてよぉ」
べっと唾を吐き捨てたロキがブリュンヒルデにジリジリと迫った。身体から滲み出す憤怒のオーラが、吹きつける北風をも跳ね返す。
「それはあなたの誤解です。私は誰も侮辱などしていません」
静かな口調で相手を説得しようとするブリュンヒルデ。しかし怒りに狂うロキに、その冷静さはかえって逆効果だったか。
「いいや。人間の血が混じっている俺を嫌って蔑んでいたんだろ。他の連中と同じようになっ！　俺だって、心の底では姫様のことを……」
ぎらつく瞳が美しき女神を睨む。瞳孔の奥には、憎悪とも愛情ともつかない複雑な色が渦巻いていた。
「私は純粋な神族であり、あなたは人の血を持つデミゴッド。この壁を越えたいと欲するならば、それ相応の努力が必要です。それをあなたがしたとは思えないのですが？」
辛辣な言葉はロキの一番痛いところを突いたらしい。見る見るロキの顔が赤くなる。
「うう……だ、黙れぇ。くそっ、お前たち！　このいけすかない高慢女神をやっちまえ！」
「オオッ！　女神なんぞ、軽く捻ってやる！」
「ブリュンヒルデ、覚悟しろよぉっ！」
それまで背後で構えていた巨人たちが、一斉にブリュンヒルデに襲いかかる。無数の斧や剣や槍が突き出され、それは巨大な銀色の激流が押し寄せるかのようだった。
「身の程を知りなさいっ！　法の神フォルセティの名の下に神罰を下しますッ！」
キュアァァッ！
戦女神の背中で輝く四枚の翼が、エメラルド色のオーラを纏って、力強く打ち振られた。しかし気合いの声とは裏腹に、巻き起こったのは小さな旋風。
「へっ、そんなもので俺たちが……うぉあっ⁉」
風は急速に発達して、二本の巨大な竜巻と化していた。そのまま暴龍のごとく巨人の軍勢を呑み込んだ。
「ぐぎゃぁぁぁっ！」
「ひいいっ、腕がぁぁぁっ！」
吹き飛ばされ、もみくちゃにされ、叩きつけられたところに、真空の刃が襲いかかる。斬り込み隊として先頭を走っていた三十人ほどの巨人兵たちは、一瞬にして戦闘不能に追い込まれていた。
「ぐわあああ、なんて威力だっ」
「こ、これが女神ブリュンヒルデの力なのか」
荒くれ者の巨人たちも勢いを失い、顔面蒼白だ。これほどの力の差を見せつけられてはムリもないだろう。
「う、ううう……ば、馬鹿な……こんなあっさりと……」
兵力の三分の一を壊滅させられて、ロキも嗄れた声を絞り出すのが精一杯という様子だ。
「武器を捨てなさい、ロキ。これが最後です。今ならばまだ偉大なるオーディン様の慈悲も受けられるやもしれません……」
燃える瞳で最後通牒を突きつけるブリュンヒルデ。燃え盛る正義の意志と、それを包み込む理性の冷静な煌めき。相反する二つを己が裡に昇華させ、力へと変える。それがブリュンヒルデの闘い方だ。
「う、うるせえよ！　俺はユグドラシルを手に入れて、オーディンに復讐してやるんだぁ」
「……仕方がありません……その穢れた霊魂のすべてを因果律の牢獄に永遠に封じ込めてあげますっ！」
大きく振りかぶったトドメの一撃がロキ目掛けて、大上段から叩きつけられようとした、そのとき。
「ま、まてぇっ！　これを見ろっ、ブリュンヒルデッ！」
ロキが背嚢から鳥籠のようなものをサッと取り出す。その中には人の姿のようなものが見えた。
「ッッ――――人間⁉」
「ブリュンヒルデ様！　お、お助けくだせえ」
「女神様ぁ！　おねげえしますだぁ！」
狭い籠の中で三人の男たちが助けを

求めて藻掻き苦しんでいる。このまま攻撃すれば間違いなく被害が及ぶだろう。

「そうだぁ。ここに来る途中、見つかりそうになったんでなぁ、漁師のやつらを捕らえたのだ」

「くっ……罪もない人を……なんて卑劣な……っ」

ブリュンヒルデは苦虫を噛み潰す表情で、剣を止めた。軍の指揮官としてなら、小を殺して大を取るのが正しいだろう。しかしブリュンヒルデにはそれはできなかった。

「はあっはあぁっ……へへへ……やっぱりな……お前は昔から優しかったからなぁ」

卑劣な作戦が功を奏して、ロキは余裕を取り戻す。

「まったく、あまちゃんの女神様だぜ……くくくっ……さあ、武器を捨てるんだ。もちろん鎧もなぁ！」

「く……」

「ブリュンヒルデ様、なりません！」

「人間のために姫様がそんなことを……」

「良いのです。民の命を救えるなら、これくらいなんともありません」

神兵たちは止めようとするのだが、ブリュンヒルデの意志は堅い。剣を投げ、続けて甲冑の胸元に手を掛ける。

「……っ」

一つ深呼吸の後、ガシャンッと重々しい音を立てて、ミスリルの装甲が地面に落ちた。鎧の上からは気づかなかったが、シルクのインナーに包まれた二つの乳果のボリュームに目が釘付けになる。スレンダーな身体に不釣り合いなほど豊満な双乳はFカップはあるだろう。重力に負けずにツンと上向いているのは、やはり若さの特権か。

「おおおっ……ブリュンヒルデのオッパイ……やっぱり結構でかいんだな。ほれほれ、下の鎧も外せよ。さもないと……」

「……わかっていますっ」

人質の籠を揺さぶられて、ブリュンヒルデは覚悟を決める。戦慄く指先で腰の革ベルトを緩めると、スカート状の装甲が太腿にそってずり落ちた。するとロキだけでなく巨人族の間からも「オオッ」というどよめきが起こった。

ほの白い太腿は鍛えられた筋肉と柔らかな皮下脂肪とが絶妙のバランスで混ざり合い、少女らしい健康美を醸し出している。うっすらと浮かぶ腹筋の縦筋に続くのは形の良いお臍。その下のデルタ地帯を隠す小さな三角の布地には縦に走る一本の皺が刻まれており、想像をかき立てずにはおかない。

「うう……っ」

無数の視線に貫かれ、さすがのブリュンヒルデも頬を赤く染める。

本来神族にとって肉体の価値はさほどではない。しかし人間族との交流も重んじるブリュンヒルデには、人間の持つ肉体感覚、それに伴う羞恥心も身についていたのだ。

「恥ずかしいかよ、お姫様」

「く……我ら王国軍の使命は、アスガルドのすべての生命を守ること。その為ならこの程度の屈辱など、何も感じません！　見たければいくらでも見ればいいのです」

毅然とした態度を崩さない。しかし言葉と裏腹にブリュンヒルデの身体は羞恥に赤熱し、背中や腋にじっとりと汗が噴き出してきた。高貴な戦女神であっても、やはり一人の女の子なのだ。

「いいねぇ、さすがブリュンヒルデ様だ。それじゃあ、その下着も脱いでもらおうか。へへへ、武器を隠しているかもしれないからな」

「な……そ、そこまで⁉　なんて卑劣なッ」

「うるせえ。人質がどうなってもいいのかよぉ」

「そうだそうだ、脱げよ」

「女神様のストリップショーだ！」

ロキが勝ち誇ったように嗤い、巨人兵たちも調子に乗って囃し立てた。

「くっ……わかりました……あなたの望み通りにしましょう」

耳まで赤く染めながら、ブリュンヒルデは両手を背中に回す。ごくりと飲み込む唾が喉に引っかかるのを懸命に飲み下す。

「法と秩序の女神である私に、このような屈辱を味わわせたこと、必ず後悔することになるでしょう！　覚悟しなさい」

背中で結んだ紐がほどけ、ブラがゆっくりとずり落ちる。

鋭い山嶺のように隆起する白い肌、その頂点にある突起を取り囲むピンク色の乳輪が少しずつ見えてきた。

「ホォオオオッ！　ブリュンヒルデのオッパイィィッ！」

昂奮でグッと身を乗り出すロキ。そのとき――――。

「一体何を手間取っているのですか？」

ドズンッッ！

「ぬぁ？」

鈍い音がして、ロキの動きがピタリと止まった。

「なんの音らぁ……あへっ？」

ブッシャアアアァァァッッ！

グラッとロキの巨体が傾いだ直後、額がパックリと割れ、滝のような勢いで鮮血が噴き出した。

「うひいいいいっ！　なんだこれ⁉　血がぁぁぁぁぁっ！」

ズゥウウンッッ！

そのまま仰向けにひっくり返り、血しぶきと水しぶきが盛大に上がる。周りの巨人たちも何が起こったのか理解できず、慌て狼狽えている。

「うぉっ……見ろ！　あれは……⁉」

一人の巨人が指さす先には、黒を基調とした鎧を纏った少女の姿があった。

プラチナのように輝く銀髪が特徴の美少女は、見た目は幼く、まだ初潮前の生娘のように胸の起伏もほとんど目立たない。身体つきも華奢で、四肢も強く抱けば折れてしまいそうなほどほっそりとしている。

身につけている衣装も愛らしいレー

著者近刊　『囚われた人妻捜査官　祐美子　母娘奴隷・黒い淫獄』『白百合の剣士 VS 黒薔薇の騎士　悦楽に散る断章コレクション』『紅の盗賊姫レイア』『淫堕の姫騎士ジャンヌ　美姫転生』ほか
好評発売中！

スが飾る漆黒のゴシックドレスで、装甲などはごく一部。とても戦場には似つかわしくない出で立ちだ。
しかしその内面に秘めたオーラは圧倒的に絶大。何よりも背中に光る六枚もの翼が桁違いの霊力を誇示している。
「哀れな劣等種族よ。大いなる神の力を思い知りましたか」
小さく可憐な唇が、冷徹な言葉を紡ぎ出す。紫水晶のような瞳は怜悧に輝き、自分の十倍はあろうかという巨人の軍勢を眼下に見下していた。
「あ、あなたは……アナスタシア……」
「……無様ですよ、ブリュンヒルデさん」
ブリュンヒルデに対しても冷たい声を投げかけ、身の丈ほどもある大剣をヒュンと一振り、血を飛ばす。
「こんな人間混ざりの雑種相手に苦戦するなんて、四枚の翼は飾りですか？ やはり王国軍はふぬけの集まりのようですね」
辛辣な言葉は、仲間であるはずの王国軍神兵たちにも向けられた。もっとも、その神霊圧におされて、反論できる者は一人もいなかったが。
「それは……人質がいたからです」
「人質？　それこそ笑止。非論理的かつ非合理的な思考です」
冷たい目線を味方であるはずのブリュンヒルデに向けるアナスタシア。
そのアナスタシアを護衛するように武装した女神たちが次々に出現する。身を包むのはお揃いの黒い甲冑。霊力を極限まで研ぎ澄ませた女神たちからは、有無を言わせない威圧感が殺気と共に押し寄せてくる。
「うっ……あれは……ワルキューレヴァクター……」
その気合いに圧倒され、同じ神族である王国軍神兵たちも息を呑んだ。
「ワルキューレヴァクターの指揮権はすべて大神オーディンに帰属する。よって人間族の人質の有無は考慮に値しない！」
黒鎧の女神たちが声高に宣言する。ワルキューレヴァクターはオーディンを守護するために作られた少数精鋭の戦闘部隊であり、国を守る王国軍とはまったく異なるのだ。
「我々はオーディン様以外の何モノにも縛られない！　倫理も信義も法も！　我々の行動原理の彼岸にあることだ！」
彼女たちの言葉自体も、まるで鋼鉄でできているかのような重く硬質な響きでブリュンヒルデたちを圧した。
「でも、ここは我々王国軍の所轄です。貴女たちには私の指揮下に入って……」
「言ったはずです。ワルキューレヴァクターに法は無関係だと。何より巨人が相手ならば、私たちのほうが適任です」
目も合わせないまま、冷たい口調で言い放つアナスタシア。
「でも……そ、それでは人質が……民を見捨てるなど……」
「アナスタシア様が仰るのだ。手出しは無用！」
「なにを！　姫様に対して無礼だぞ！」
睨み合う王国軍とワルキューレヴァクター。一触即発のような張り詰めた空気が辺りを包み込み、巨人たちも近づきがたい異様な状況となった。
「ぐろろろぉぉぉっ……てめえら勝手に話してんじゃねえぞ……うああっ……お、お前はぁぁっ！」
静寂を裂くように、頭の傷を再生させたロキが髪を振り乱して海中から立ち上がった。だが……。
「ぐお……ア、アナスタシア……お、お、お嬢様……いや、アナスタシア……っ！」
アナスタシアの顔を見て後じさる。その顔に浮かぶのは恐怖か畏怖か。
「私の名を呼ぶなど馴れ馴れしいですよ……元使用人の分際で」
銀髪の女神が語気を強める。
「私の小間使いだったあなたが、このアスガルドに弓を引くとは、無礼千万。どうやら躾が足りなかったようです」
幼げな可憐な唇が、人間で言えば自分の父親ほども年が離れた男に、辛辣な言葉を浴びせていく。
「私の前に跪きなさいロキ。そうすれば命だけは助けてあげましょう」
アメジストの瞳は自分の数倍も大きな巨人の男を睥睨し、見下し、圧倒する。絶対的な支配者の風格を纏って……。
「う、う、うるせえ。俺はもう昔の俺じゃねえ。お、お前も、オーディンのクソじじいもぶち殺してやるから覚悟しろっ」
「お黙りなさい、野良犬ッ！」
ジャキンッ！
大剣の切っ先をロキに向かって突きつける。ミスリル金属の剣はかなりの重さのハズだが、アナスタシアはそれを細腕一本でタクトを振るように軽々と扱う。
「私はともかく……神族の象徴たるオーディン様を侮辱するとは……やはり愚か者に慈悲は無用」
聖なるオーラが殺気に染まり、冷たい視線は氷の刃のように、哀れな生け贄を見下す。滅多に感情を出さない彼女が、怒っているのである。
普段が物静かなだけに、そのギャップの大きさに、ブリュンヒルデたちも寒気を覚えるほどだ。
「……人間などという穢れた血肉を受け継いだのがあなたの最大の不幸。二度と不遜な口をきけないよう、消し去ってあげましょう。冥えよ、覇剣『ヴィザール』……光力最大顕現っ！」
巨大な剣を頭上にサッと掲げると、まばゆい光が天空に向かって放たれた。
「アナスタシア……！　あ、あれは究極奥義の構え!?」
漆黒の女神の体勢を見たブリュンヒルデが表情を強張らせた。
「やばいぞ、離れろ！」
それを聞いたワルキューレヴァクターの兵士たちが血相を変えて飛び去る。
「く……っ。皆さんも急いで砦の中へ。

やっと見つけた妖狐
あれからお前をどれだけ探したか…
因縁に決着をつけるべく、鬼の娘は妖狐に挑む！
鬼娘と妖狐
漫画COMIC／ふみひろ
前と同じで穴蔵に隠れてると思ってこういう場所を重点的に探したけど正解だったようね

ふむ…
誰かと思えば術の触媒にと角を切り落としたいつぞやの鬼の小娘か
確か角を頂いた後に触手妖魔で弄んでから
人間に売り飛ばしたんじゃったな
無事逃げ出せたのか元気そうで何よりじゃ
角を折られたとはいえ人間ごときに
私が後れを取るはずがないッ

それに卑劣な術を喰らわなければお前にだって

負けるはずはなかったっ

すっ

ぶんっ

ぐぐ…

卑劣な術と言うがな 小娘よ

くいっ

結構な上位妖術でかなり妖力を使うのだぞ

この淫紋は

ぶるぶる

あ…♡

ぶるぶる

何ら策があるかと思ったが
それも無しか小娘よ…
角を無くし
弱体化しておる上に
淫紋を発動されれば
立つこともままならんとは
それでよく挑んできたな
ハッ
ハッ
ハッ
ガク
ガク
ガク
感情に任せての行動か…
生まれてから十数年 鬼族としても
妖魔としても赤子のお主では
仕方がないのかのう
ビクッ
ビクッ
ビクッ
こ…殺せ…
私の負けだ
ま…前のように
弄ばれたくない
戦いの結果で…
死にたい…
そう言えばお主達鬼族は
掟で自決は出来んかったか…
戦って死ぬか勝つまで挑むか…
じゃったかな
ふむ…ならば
もう一度挑む機会をやるぞ
まあ相手は私ではないがな
ガク
ガク
ガク

先日南蛮人から面白い物を手に入れての
「れんきん」とかいう術で作られた「すらいむ」と呼ばれる妖魔じゃ
町娘を拐かして試そうと思っとったが
人間より丈夫な鬼の方がコイツを試すのには都合が良いじゃろ
試すって…また前の触手妖魔の様に私を…
ボト
ボト
びくん
ガク
ガク
ガク
ガクン
ふふ
ガクン
すり
すり
ひっ
今のお主は淫紋の効力で動く度全身に官能が走るはず
逃げる事は出来んぞ素直にすらいむと戯れろ
びくっ
びくっ
くっ
くっ
ぐるる
ぐるる

Remilia
レミリア
～聖天騎士・ふたなりの快堕～
清廉潔白な女騎士がふたなり化！
守るべき女王と仲間を自らの手で穢してゆく――
小説／NOVEL 089タロー
挿絵／ILLUSTRATION しーあーる

マティエール。そこは、人族と魔族が長年争いを続ける世界。
光と闇、理性と欲望。相容れぬ神々が互いの主張を懸け、創り出したと伝えられる大地。
そこに生きる人は国を、魔族は魔王を立て、飽くなき闘争を続けてきた。
争いの勃発から、はや五百年あまり。
永きにわたる果てなき戦いに、今、ようやく転機が訪れようとしていた。
「ここまでよく来たものだ、騎士レミリア。いや、グラマトンの勇者殿、と呼ぶべきかな？」
決戦の場、魔王の牙城。篝火の照らす薄暗い広間に一人の男が悠然と佇む。
血の色をした長衣、筋骨隆々の逞しい体躯、長い赤髪と猛々しい角、邪悪と欲に染まった笑み。
その名を淫魔王ベギアードと言う。魔族の長にして悪の権化、自らを闇の使者とも語る欲と破壊の申し子だった。
「淫魔王、ついにその魔手も切り落とされるときが来たのだ」
相対するは、一人の若く美しい女。
齢は十九か二十歳ほど。凛とした眼差しと美貌を持つ、青く長い髪の持ち主だった。
身に纏うのは純白と青の輝く鎧。比較的軽装で装飾も多く、腹部と太腿の露出が眩しい、無骨さとは無縁の見事な女性用防具である。
騎士然としたその姿は気品すら感じられるほどに美しい。すらりとした白い肢体には、若い女性特有のしなやかさと色気が垣間見えた。
その女の名はレミリア。マティエールの主国グラマトンの栄えある騎士であり、淫魔王討伐に旅立ったうら若き英雄でもあった。
そう――人間の英雄と魔族の王、この二人の邂逅こそが世界の明暗を分けるのだった。
「我が主君クイーン・マリアの命により淫魔王ベギアード、お前を討つ。数多の人を殺めし蛮行と永きにわたる因縁に今こそ終止符を打たせてもらう！」
ここに来るまでの道のりは、決して平坦なものではなかった。抜き放った長剣には無数の傷がついており、数々の激戦を潜り抜けてきたと知れた。
しかし彼女の眼差しには一点の曇りもなく、透き通るような菫色が決意と勇気を湛えて光輝いていた。
「いくわよみんな、必ず勝つの！」
レミリアが駆けだすのに合わせ、背後から三名の仲間たちが続く。
「応！　任せな、周りのザコどもはしっかり掃除してやるからさ！」
少々荒っぽく大剣を振りかざすのは、戦士ジュリ、元傭兵の傑女だ。浅黒い肌に黒のポニーテール、長身かつ豊満な肢体をビキニ同然の服で包む、野性的な色香を持つ女性だった。
「ジュリになんて負けられませんわ、淫魔王討伐はわたくし、大魔導士マキナの手で成されるべきですのよ！」
一足遅れて術を放つのは魔導士マキナ、ローブ姿の若い女性だ。キラリと光るプラチナブロンドを長く豊かなウェーブにした、勝気そうな人物だった。
「行ってレミリア、フォローは任せて」
さらに後方で弓を構えるのは、若草色の服に身を包むフードを被った小柄な少女、アーヴィ。淫魔王討伐に手を貸してくれる、尖った耳を持つエルフ族の弓使いである。
大剣、魔道、弓術、各々エキスパートたる仲間たち。彼女らの手助けがあったからこそ、ここまでたどり着くことができた。頼もしい仲間たちの存在をひしひしと背後に感じながら、レミリアは真っ直ぐに突き進み剣を振るう。
「面白い、やるではないか人間の娘」
魔王の応撃は闇術。黒雷と波動が次々と飛び交い焼き貫こうとしてくる。しかしレミリアはことごとくそれらを見切って切り裂き、一気に肉薄して魔王の胸板に剣撃を放つ。
「淫魔王、覚悟！　――なにっ――？」
閃光のごとき鋭い突きが見えない何かに弾かれた。隙を晒したレミリアに向かって無数の黒い触手が迫る。淫魔王の背中から生えた蛇のような形のそれらは、瞬く間に彼女を搦め捕って宙吊り状態にしてみせた。
「フハハ無駄だ。魔王たる我には闇の衣なるものがあることを知らぬのか」
闇の衣。それは最上位の魔族だけが持つ闇の神からの加護である。この障壁を突破するのは人間にはほぼ不可能とされていた。
「もう終わりか？　威勢はよかったが剣が通じねば一介の小娘にすぎぬか」
淫魔王は腕組みして嗤いレミリアのアゴをクイと掴む。
そして右手を胸の膨らみに這わせた。
「な、なにを、くぅっ、触るなっ……！」
「ふむ。噂に違わぬ美しさと身体つきだ。この豊かな乳の袋、鋭くくびれた腰、若い牝鹿のごとく締まっておりながら肉のある尻、牡の欲望を掻き立てるには申し分のない肉体よ」
言って淫魔王は傲岸な笑みを寄せる。
彼の言い分は、しかしもっともなものだった。レミリアの肢体は程よく成熟し、歳若い女の肉付きと色香を持ち合わせていたのである。
熟れた果実を彷彿とさせる、たわわに実った二つの乳房。たゆまぬ鍛錬の賜物である引き締まったくびれ腰。スカートアーマー越しにもよく分かる発達した骨盤と臀部の盛りあがり。足の長さと頭身の高さも相まって、並の街娘など比にならない素晴らしいプロポーションを形作っていた。
しかも鎧は露出が多く、胸の谷間から下腹までが大胆に開いている。魔法の加護を受けてはいるものの、胴の部分は下着同然で白い肌があらわだった。
鎧の隙間に指を入れて生の乳肉を揉みしだく淫魔王。その名は伊達ではなく、好色な笑みが異様なほど似合う。
「いい感触だ、柔らかくも張りがある。人間の娘は我が貫くとたちまち歓喜し壊れてしまうが、さて、噂の勇者殿は、

どこまで耐えてくれるやら」
「んっ……そうやって罪もない女性を犯してきたのね……絶対に許さない」
「くそ、レミリアを離せ、こいつら！」
仲間たちもフォローに入ろうとしたが護衛の魔族はさらに数を増していた。ジュリが必死に大剣を振るいマキナが魔法を連発するも、近寄ることさえ敵わない状況だ。
「戦いの最中にまで、んぁっ、こんな破廉恥な真似を……！」
「どうした、汗ばんできたぞ。我は欲の化身、色恋も満足に知らぬ小娘など瞬く間に子宮まで溶かしてやろうぞ」
淫魔王は余裕の笑みで乳肉を散々こねくり回した。
指の動きが激しくなるにつれ、レミリアの頬が色めかしく紅潮していく。
「ククク、そろそろ感じてきただろう？　吐息が甘く濡れ始めたぞ」
「はぁ、はぁ、く、好色な魔王め……」
かすかに吐息を弾ませるレミリアが、揺れる菫色の瞳に意思の光を灯す。
「その油断が命取りだ、アーヴィ！」
「任せて――ハッ！」
背後から飛来した一本の矢が、レミリアごと触手を貫いた。
どう見ても同士討ち。触手を狙ったに違いないが、完全に本末転倒だろう。
無論、魔王の表情にも動揺が走る。
だが、貫かれたはずのレミリアは、無傷で触手の縛めから逃れていた。
「馬鹿な、致命傷のはず――!?」
「この矢が射るのは闇の者だけ。それ以外には効果がない。ボクたちエルフが作り上げた特別な矢なんだ……！」
アーヴィが言うように、彼女の放ったその特別な矢は魔族にのみ効果がある。ゆえにレミリアは一切の痛打なく触手から逃れられたのだ。
そしてレミリアが取り出したのは、淡く光る水晶の珠。
「まさか、それは――!?」
「無策で来たとでも思ったのか？　闇の衣への手立ては、ある！」
それは光の神の加護を持つ石を研磨したもの。魔族が嫌う成分を含み闇の力を弱体化させる。このときのために遥か霊峰で手に入れてきた霊石だった。
霊石が輝き闇の衣が一瞬霧散する。魔王相手ともなれば、その効果時間は微々たるものだろう。
しかし勇者レミリアの腕ならば、刹那の時間で十分だった。
「この瞬間を待っていた、はぁあっ！」
白く輝く愛剣が、魔王の胸板を真っ直ぐに貫いた。
「馬鹿な……我が、淫魔王ベギアードが、たかが人間ごときに……！」
「言ったはず、みすみす接近を許すその油断が命取りだと」
すべてとは言わないが概ね作戦通りであった。闇の衣を剥がせなければさしものレミリアたちとて勝機はない。ゆえに敵の油断を誘い一撃必殺の瞬間を待ったのだ。
「淫魔王ベギアード。その穢れし生を終え、光の神の御元で浄化されよ！」
レミリアは剣を構え、一息に淫魔王の首を刎ねた。
頭部を失った魔王の巨躯が、背中の触手ごとガクリと床に倒れこむ。
同時に牙城までが、その生を終えたかのようにガラガラと倒壊し始めた。
「まずいですわ、きっとわたくしの強すぎる魔法の余波ですわ！」
「こんなときにまでくだらん見栄を張るんじゃない！」
「レミリア、早く！　こっちだよ！」
後方にいた仲間たちが退避しながら呼びかけてくる。レミリアも剣を納め、足早に離脱しようとする。
と、そのときだった。牙城の奥から、一人の魔族の女が駆け寄ってきた。
「淫魔王様、そんな、淫魔王様ぁ！」
青白い肌と羽根、角を持つ妖艶な容姿の女魔族だった。所々に金の装飾を持つものの、女らしい豊満な胴体は乳首と陰部程度しか隠すものがなかった。
おそらくは淫魔王の側近か何かだろう。女はレミリアには目もくれず、淫魔王の亡骸に抱きつき咽び泣く。
「なんてこと、愛しの淫魔王様が、このようなおいたわしいお姿に……」
「レミリア急げ、もうもたないぞ！」
「ええ、みんなも早く！」
何とはなしに気になったものの情を移す相手ではない。レミリアは踵を返し、崩れゆく牙城を後にするのだった。

※

こうして淫魔王と勇者一行、人間と魔族、光と闇、相容れぬ両者の戦いに、ひとまず幕が下りたのだった。
魔族らは敗北し散り散りになった残党は討たれ、勝ち残った人間たちが後の世を謳歌する。最大の敵を討ち果たした彼らは喝采し長く宴に酔うだろう。
――そうなるはず、であった。
しかし、争いとはそう単純なものではない。残された者が存在する限り、禍根は後世まで尾を引き続ける。
人と人とが、そうであるのと同じように。
「淫魔王様……ああ、わたしの愛しき淫魔王様……」
夜明けと共に朝日が滲みだす地平線。崩れ落ちた牙城、光に浮かぶ瓦礫の頂点で、女は亡骸を抱き膝をついていた。
「このヴェサリエを置いて逝ってしまわれるなんて。ああ、わたしはこれからどうすれば……」
女は魔王の情婦だった。数ある女の中でも特に気に入られ、傍にいることを許された存在だった。
女は魔王を愛した。彼の子を孕みたく思っていた。それが叶わぬと知った後ですら願望を捨てきれずにいた。
しかし今、その願いは完全に潰えた。魔王の敗北、死という形で。
「いいえ、まだ……手はある……」
と、何を思ったのだろうか。泣き腫らした女の赤い瞳に、底冷えするような決意の炎が灯り、揺らめいた。
その人ならざる青白い手が、淫魔王の亡骸の股間を慈しむように撫でる。
「まだ温かい……淫魔王様の熱いモノ

著者近況　またまた書かせていただきました。ご覧いただければ幸いです。今回は非常に長い内容となってしまい、ご迷惑をおかけしました。申し訳ございません。

は、まだお力を失ってはいない……」
無論、いくら巧みに撫でたところで反応するはずはない。男は心の臓腑を貫かれて滅んだのだから。
しかし女は、狂気を孕んだ赤い瞳で握る男のモノを見据えた。
「愛おしい淫魔王様……せめて、せめてここだけでも生き長らえてくださいまし。――そして、わたしが立てたあなた様への愛の誓いを――」
女の唇に、魔族特有の凄惨で邪悪な笑みが浮かぶ。そこには愛する男を失ったことへの憤怒の色が濃くあった。
「勇者レミリア……許さない、あの女、あの人間どもめが……！」
女の右手が天を衝くように掲げられた。その手は開かれることなく何かが握られたままであったが、それが何なのかは白い逆光で判然としない。
ただ、ぽたぽたと滴る赤黒い色と、生々しい棒状の何かだけが見えた。

※

「騎士レミリア、本当によくやってくれました。あなた方のおかげでわたくしたち人間は、心安らかに明日を迎えられることでしょう」
淫魔王が討たれて数日後。
人間たちが築いた国家、主国グラマトンの王宮の広間では、英雄たちの凱旋式が華やかに執り行われていた。
「あなた方の勇気ある行動が世界に光を放つのです。世界の本質は光。欲望を凌ぐ善の意思こそが神がお望みになるあるべき姿だと証明されたのです」
重鎮らが多数集まる荘厳美麗な謁見の間にて、一人の女性が惜しみない賛辞を口にする。
クイーン・マリア。人間国家群を代表する主国グラマトンの女王である。
その神々しいまでの美しさは今もって周囲が息を呑むほど。齢三十に近いながらも微塵も若さを損なうことなく、聖母のような柔らかな美貌が眩しいばかりの女性だった。
その慈愛に満ちた微笑みには誰もが心を奪われる。後ろで結い上げた豊かな金髪、優しげな眼差しに魅惑的な赤い唇。大理石のような美しい肌に、ドレス越しにも隠しきれない肉感的で熟れた肢体と、女としての魅力も相まって絶大な人気を誇るカリスマだ。
そしてレミリアにとっては仕えるべき主君その人でもあった。勇者と呼ばれ旅立ちはしたものの、本来彼女は王国の騎士なのである。
「身に余るお言葉にございます。わたしはただ、一介の騎士として主君の命を果たしたまでのこと」
頭を垂れ、跪いてレミリアは言う。
「なにより、わたし一人の力ではとても。後ろに居並ぶ仲間たちの力添えあっての大事でした」
勇者だ英雄だと騒がれはしたものの、彼女自身はそんなつもりなど毛頭ない。国と女王を守る剣として、自らの力を振るったにすぎないのである。
だが、優れた騎士である彼女の名声は旅立ちと共に確かなものとなっていた。魔王討伐が成った今、その名声はもはや不動となるのは確実だった。
そんなレミリアを、女王マリアは最高の形で称える。
前もって決めていたのだろう。臣下から儀礼用の剣を受け取り、跪くレミリアの肩に置く。
「騎士レミリア。誉れ高き英雄。今ここであなたに、聖天騎士の称号を与えることといたしましょう」
聞いたレミリアはびくっと肩を震わせた。聖天騎士、それは初代グラマトン王だけが唯一呼称を許された称号。
それを授与するということは文字通り末代までの誉れとなる。想像だにしない名誉にレミリアは動揺を隠せない。
「クイーン・マリア、それは……」
「受けてくれますね、レミリア。我が騎士よ」
「っ――はい。身に余る光栄なれど」
瞬間、周囲がおぉ……とどよめいた。聖天騎士は女王にすら物申せる、言わば権力を超越した存在。世界を救った英雄には相応しい栄誉だと言えた。
（まさか、わたしがこのような称号を……信じられない。けれど……）
「やったなレミリア。これでお前は晴れて真の勇者殿だ」
「わたくしのおかげだということを忘れないでいただきたいですわ」
「――よかったね。人間のしきたりは好きじゃないけど、レミリアが褒められるのはボクも嬉しいよ」
凱旋式が終わりテラスで一人夜風に当たっていると、集まってくれた仲間たちも思い思いに喜んでくれた。
レミリアからすれば、彼女らも同様の名誉を得てよいはずであった。傭兵あがりの戦士ジュリは最年長で見識も深く、その豪快な戦いぶりと姉御肌な気質に助けられた。魔導士マキナは少々プライドが高いものの、根は善良で強力な術に幾度も救われた。エルフのアーヴィは人嫌いで最初はなかなか馴染めなかったが、幼げな外見に似合わず義理堅い性格で、誰より真剣に旅に同行してくれた。
仲間たちを前にして自分一人が脚光を浴びることに、抵抗を覚えないではないレミリア。
それでも潔く賜ったのは、それが女王からの心尽くしの御礼だと分かるからである。
「おっと、女王陛下がおいでみたいだ。ここらでアタシらはお暇するかな」
女王の姿を認めたジュリが、仲間たちを促し、そっとテラスを離れていく。
粗野に見えるジュリだが実は気配りのできる女性だ。気を利かせてもらったことに内心で苦笑しつつ、レミリアはクイーン・マリアと向き合う。
「これは女王陛下、お供も連れずこのような場においでになられるとは」
「ふふ、堅苦しい態度はもうおよしなさいな。今は二人だけ。昔のように気楽にしてくれればよいのですよ」
柔和な笑顔を美貌に浮かべ、少し砕けた調子で女王は言う。

著者近刊 『女体化魔王と子作りしちゃいませんか？』『子作りヴァルキリー！ 戦乙女を孕ませちゃえ』『デキる妹はいかがですか？ 淫魔な妹と甘エロ子作り』『異世界でもデキる妹はいかがでしょうか？』他
好評発売中！

隣に並んだ彼女を前に、レミリアは軽く口籠る。
「女王陛下……あなたは我が主君なのですから、どうかそのような……」
「あら、幼い頃はお姉ちゃんだなんて慕ってくれたのに」
からかいを含む女王の台詞にレミリアは頬を赤くさせられる。
実は二人は子供の頃から親しい間柄だった。騎士の家柄と王家の息女、身分に大きな隔たりはあったが九歳ほど年上のマリアに妹さながらに懐いていたのだ。称号授与の際に彼女の本心が分かったのも、そういった経緯があってのことだった。
時が経ち、マリアが今は亡き夫と婚姻して以後、さすがにレミリアも立場を変えた。けれど公の場でなければ、マリアは親しげな顔を向けてくる。
そのためレミリアは、二人きりで話すことに少々気恥ずかしさを覚えてしまうのだ。
「誰が見ているとも知れません。それにお立場というものが……」
「最低限の礼儀は守りますから安心なさい。それに、こうして無事に帰ってきた妹を労う暇は欲しいのです」
そう言ってマリアは、両手を広げ、そっとレミリアを胸に抱いた。
「じょ、女王陛下――マリア、様……」
「よく戻ってくれました。あなたが淫魔王を討つなどと言いだしたときには夫ばかりか妹まで失うやもと怯えたものですが……本当に、よく無事で……」
抱えてきた不安を吐き出すように、マリアは声を湿らせていった。
レミリアには分かる。心優しく母性的なマリアは本気で自分を妹のように思い、送り出すことに重責を感じていたのだろう。早くに夫を亡くしただけになおさら失う恐怖に苛まれたはずだ。
それでも自らを律し女王たろうとする彼女を、レミリアは心から尊敬し崇拝する。自分にとっても心の姉であり、こうして優しく包みこんでくれる母のような存在なのだから。
「……マリア、様……わたし、お役に立てましたか？　マリア様に誇れる騎士になれましたか？」
もらい泣きしそうになってレミリアもそっと腕を回すと、マリアは強く抱き、髪を指で梳いてくれた。
「もちろんです。無事戻ってきたら必ず聖天騎士の称号を与えようと思っていました。帰ってきてくれて本当にありがとう、わたくしの大切な妹……」
（マリア様……ああ、嬉しい……！）
レミリアの胸中に、愛おしさという感情が広がっていく。
淫魔王討伐の任も、本音を言えば彼女の役に立ちたかっただけ。母のように優しく、姉のように甘い女性、その行く先を遮る悪を何としても排除したい、そんな思考が英雄への道を歩ませたにすぎない。それはいかにも子供じみた発想だが、武の才に恵まれたレミリアにはうってつけの道でもあった。
こうして抱きあっていると、幼時を思い出し本音を曝け出したくなる。すべては貴方のため、そう言えばきっと怒るだろう。危険に晒すことを望むはずがないと。そういう人だと分かっているからこそ命を賭して仕えたい。
（マリア様の胸、温かい……それに、いいにおいがする……）
ファーのついたドレスの胸元から何とも言えない甘い香りが漂っている。亡き母を思い起こさせる母乳にも似た甘い芳香が。それは頬を埋めた先、白い乳房が届けてくる。
露出自体は控えめだが、これでマリアは素晴らしいプロポーションを持っている。特に目立つのは大きな乳房で今にも襟ぐりから溢れんばかりだ。緩やかなカーブを描くくびれ、スカートに隠れて普段は見えない安産型のふくよかな臀部、そのどれもが魅力に溢れ同性でさえ見てため息が出るほどだ。
憧れゆえか、彼女が夫を得たときには強い寂寥感（せきりょうかん）があったのをレミリアは覚えている。彼女自身もよく美しいと褒められるが、マリアという華の前では道端の雑草にすぎないと思っている。
その清らかな美貌はまさに国の宝、誰にも汚させてはならぬと心から思う。
同時に、彼女の抱擁と寵愛を受けられることに密かな優越感を覚えもする。
（マリア様……ああ、こうしている間だけは、わたしだけのマリア様だ……）
我知らず抱きついたままとなり胸に頬ずりなどをするレミリア。マリアは微笑み、温かな抱擁を続ける。
と、そのときだった。不意に他者の気配を察し、レミリアははっと顔をあげた。
「失礼いたします。女王陛下と聖天騎士様にお目通りしたいとの者が」
立っていたのは一人の女だった。黒い侍女服を着ているので、数いる侍女のうちの一人なのだろう。
しかしレミリアは薄ら寒く感じた。侍女がいたのはほんの二メートル程の距離。これほど接近するまで気づけなかったことが、ひどく不自然に思えた。
しかもその侍女は、病的なまでに色白の肌をしていた。顔立ちはかなり美しいものの作り物めいた印象があり、まるで人形のようだと感じた。
（それにこの顔、どこかで……）
このような侍女は記憶にないが、顔にはどこか覚えがある。見たのはつい最近だと思うが、気の緩みからか即座には思い出せなかった。
「こんな夜更けに、どなたが見えたのです？　急務でなければ明日にしていただくよう申し伝えなさい」
「その必要はございません。すでにお見えになられておりますゆえ」
女王の顔に戻ったマリアに、侍女は冷えた声音で言う。
「なにを勝手に、許可もなく女王陛下にお目通りを許すなどと！」
レミリアは怒声を放ち腰の剣に気をやった。不穏な輩ならば斬らねばならないと思ったからだ。
が、はたと気づく。宴の席の直後な

ガッ
ガッ
あ…
あ…
ククク…
うまそうな人間だ
早速オレの糧にしてくれる
そこまでよ
デモンコア!!
ぬう!?
ドーン
グェッ
天煌聖姫
ヴァーミリオン
同じく！
セルシアン

ピンチとあらば颯爽登場！

母娘変身ヒロイン参上!!

街の平和は乱させない!!

私たちがいる限り

天煌聖姫

ヴァーミリオン

性戯の艶舞

漫画(COMIC)／火愚夜　原作(ORIGINAL)／有機企画

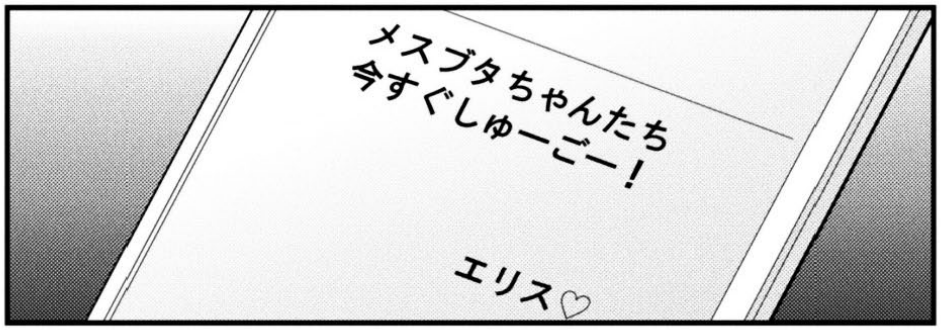
好評発売中！

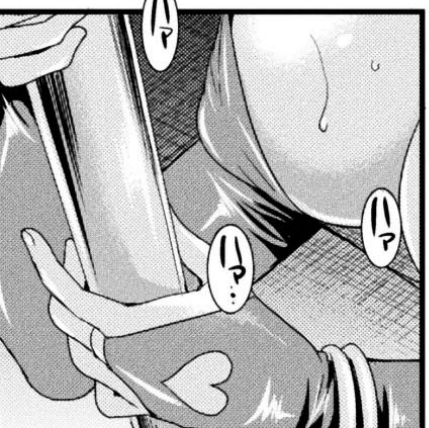
二次元ドリームノベルズ

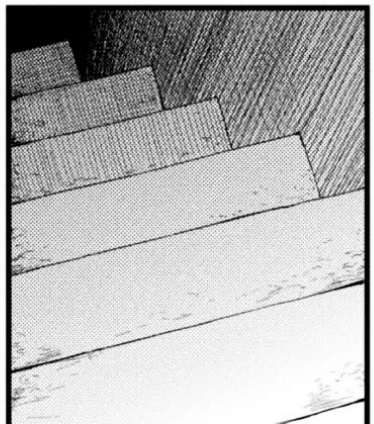
しゅうう…

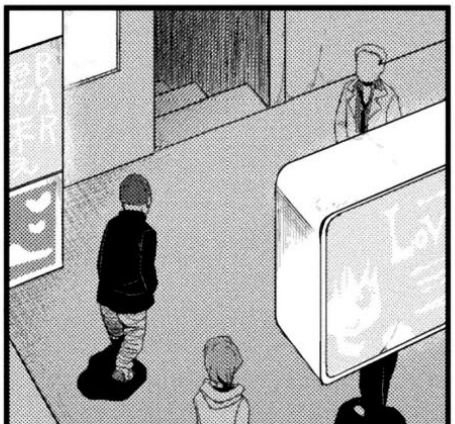
大丈夫？ケガはない？
は…はいすごいですねお姉さんたち…

ふふっお姉さんだって
う…うるさいわよヴァーミリオン


メスブタちゃんたち
今すぐしゅーごー！
エリス♡


ハァ
ハァ
ハァ…





ふふっ
やってる
やってるー♥

昼は街で人助け
そして夜はこんなところでフタナリポールダンスショー♥
ホント大活躍ね母娘ヒロインさん
くっ
しっ…仕方がないでしょう
それはエリス様が私たちにさらなる改造・調教をする費用を稼ぐためにって…

禁じ手戦姫
サクラヒメ
フタナリ淫獄に堕ちる黒髪乙女
第四回 学園フタナリ奉仕、惹かれていく心
小説/NOVEL 有機企画(ゆうききかく) 挿絵/ILLUSTRATION 緑木邑(みどりぎむら)
サクラヒメ……
恥辱のフタナリ書道!?

地下の戦いから数日後。小鳥のさえずりが耳に心地よく、うっすらと朝靄のかかる早朝。
岩戸学園近くの駅前で、建宮流華はデートの待ち合わせをしていた。お相手はもちろん良平だ。
清楚な白のワンピースを着こなし、ショルダーバッグを斜めにかけている。紐が胸の谷間を強調し、通りかかった男性の視線を惹きつける。少しいやらしいかなと思いつつも、彼氏にアピールしたいという気持ちが勝ったコーディネートだ。
(今日は良平に積極的になってもらうために、わたしの魅力をいっぱいアピールしないと)
罰ゲームのことを考えると憂鬱になるが、今だけは気分を変えて楽しみたい。鬼蛙の調教に屈しないためにも、恋人の温もりを近くで感じたかった。
落ち着かない様子で到着を待つ。電車の出発時刻まであと五分というところで良平がやってきた。
走ってきたのか額に汗をかいている。
「ごめん遅れて。自転車のチェーンが外れちゃって」
「遅い。だがギリギリ遅れなかったことは評価する。ほら汗を拭いてやろう」
「い、いいよ。一人でできるって」
「遠慮するな。じっとしていろ」
バッグからハンカチを取り出し、ぽんぽんと汗を拭く。良平は照れ臭いのか、モジモジとしていた。傍目から見ればまごうことなきバカップルだ。
しばらくして電車が到着する。満席だったので、二人はドアの前に並んでつり革につかまった。
流華は良平に肩を寄せながらたずねる。
「今日はどこへ連れていってくれるんだ？」
「三波マリンパークに行こうよ。この前改装したし、流華は海の生き物好きでしょ？」
「ああ。子供の頃はよく家族で海水浴へ行ったな」
「クラゲに刺された時は大変だったねー。大泣きしちゃって海の上なのにしがみついてくるんだもん。もう少しで溺れるところだったよ」
「そ、そのことは忘れろ。わたしも若かったんだ！」
ぷくりと頬を膨らませ、そっぽを向く。戦闘時からは想像もできない年頃の少女らしい一面だ。
そこへ部活に向かう途中なのか、大量の学生が乗車してきた。あっという間にスペースが埋まり、車両がすし詰め状態になる。
「うわっ」
「流華だいじょうぶ……っぷ」
二人も人波に流されて密着する。しかし急なことだったので、小柄な良平の顔を胸が挟み込んでしまった。
たわわに実ったGカップ巨乳が顔面をムニュムニュと圧迫する。ボディソープの清涼感ある香りが少年の鼻腔をくすぐった。
「す、すまない良平」
「んっぷっ……へ、平気だよ」
普通ならここで身体を離すのだが、慌てる良平の姿に流華はイタズラをしたくなった。日頃責められている反動なのかもしれない。
さらに胸を押しつけ、柔らかな双乳でおっぱいサンドイッチを敢行する。
「悪いが身動きできないんだ。しばらくこのままでもいいか？」
「え……いいの？」
「窮屈な思いをさせてしまうが仕方ないな。うん仕方ない」
「わぷっ……んっ、む……むぅ……」
むにゅっ♥ むにゅっ♥ ふにゅん♥
「苦しくないか？ んっ……♥」
「あぷ……う、うん」
コンプレックスであるはずの胸乳を最大限に利用して、顔を揉みしだく。幼馴染が赤くなるのが可愛くて、もっと押しつけてしまう。
太腿に触れる少年の股間からペニスの熱が感じられ、固くなっていることがわかった。男性の生理現象がますます流華の欲情を煽る。
(可愛い。わたしと同じなんだ)
ペニスの気持ちよさは嫌というほど理解している。流華のフタナリペニスも半分ほど勃起し、軽くワンピースを持ち上げた。
「そ、そろそろ到着だね」
「うむ。そうだな」
電車が駅のホームに入ると、キューブをいくつも重ねたような建物が見えてきた。
三波マリンパークは海岸線沿いに建てられた水族館で、休日はカップルや親子連れで賑わう地元の人気スポットだ。少し歩けばホテル街もあり、盛り上がった二人がそのままということも珍しくない。
「おおっ。ずいぶんキレイになったな」
「改装効果だよね。ピカピカだよ」
二人は手をつないで水槽を見ていく。時おりマシュマロのような膨らみが腕に当たる。
(ちょっと近くないかな？)
生徒会長や剣道部で指導をする時とは違う流華の仕草に良平は戸惑う。またもや巨乳を強調されて、気が気でない。
「流華……その近すぎない？」
「いいじゃないか。わたしたちは恋人同士なんだぞ。ふふ、そんなに気になるなら触ってみるか？」
「か、からかわないでよもう！」
「お、あそこにジンベイザメがいるぞ。行こう！」
「待ってよー」
手を引かれて走り出す良平。流華は目を輝かせて、どんどん進んでいく。
群れをなして回遊する小魚や、面白い顔をした深海魚。蛍光色に光るクラゲや、アスレチックのような水槽を走り回るカワウソ。お客の言うことをよく

著者近況 連日の暑さで真っ黒に日焼けしました。忍者のように黒く、闇にまぎれて生きていこうと思います。

聞き、芸をするイルカなど退屈することはなかった。

そして楽しい時間というものは、あっという間に過ぎていく。水平線の向こうに太陽が沈みはじめ、オレンジ色の光彩が空と海を染める。テトラポットに止まったカモメの鳴き声が、まだ遊び足りない気分にさせた。

流華と良平はベンチに座りながら海を眺めていた。

少年の横顔を見た流華は、

「良平。あれを見てくれ」

「あれって何？　何も見えないけど――」

振り向いた瞬間、二人の唇が重なった。

「ん……んんっ」

「んむ……りゅうか……」

柔らかな唇の感触が少年のすべてを蕩かす。流華はついばむように唇を求めた。

「ぷはっ、初めてだな良平」

「ふぁ……は、初めてだね」

陵辱ではない心が通い合った初めてのキス。それは凄惨な戦いを繰り広げ、今はフタナリ調教の渦中にいる戦姫の心に染みわたっていった。

（できるのならもっと……もっと良平がほしい。だが今のわたしは……いや、いつかきっとわかってくれるはずだ）

今はこれで十分だと自分に言い聞かせる。必ず鬼蛙を倒し日常へ戻る。元の身体を取り戻すと黒髪ヒロインは胸に誓った。

◆◆◆◆

授業が終わり放課後。

岩戸学園の生徒たちは部活で汗を流したり、残っておしゃべりに興じたりと、各々の青春を謳歌していた。

剣道部員の三城良平もまた、部活動に勤しんでいた。体育館で他の部員たちと竹刀を振る。飛び散る汗が床板に水玉模様をつくる。

「なあ建宮部長を知らないか？　今日はまだ姿を見てないんだ」

「いえ、ぼくも知りません」

副部長が良平にたずねてくる。腕前は男子生徒の中でも一番で、白い歯がまぶしい。

「おかしいな。何も言わずに休むような人じゃないんだが。おまけに新入りもいないし、まったくどうなっているんだか」

「ぼく連絡してみます」

良平は部室に戻り電話をかける。だが流れるのは留守番電話のメッセージだけだ。

（流華どこいったんだろう。それに蛙坂くんも）

二人の行方が気にかかる。ありえないと思っても悪い想像が頭をよぎる。

「……偶然だよね」

不安を打ち消すようにつぶやき、良平は部活に戻ろうとする。彼は気付いていない。体育館の隅、普段なら部員たちがトレーニングに使っている場所に、まったく人がいないことを。

まるでそこだけが切り取られ、この世界に存在しないかのように。

「ぐぬぬ……こ、これでいいんだな？　またこんな破廉恥なことを……」

「いい加減慣れたほうがいいと思うけど。キミは不器用だね」

「誰が慣れるか！」

黒髪乙女は端正な細面を紅潮させる。今彼女が身に着けているのは、上靴と靴下のみだ。スラリとした長身が何に遮られるわけでもなく、生まれたままの姿で外気に晒されている。

隣には鬼蛙こと蛙坂がニヤニヤ笑いを浮かべていた。

現在この一角は封鎖結界でこの世から隔絶されている。良平や部員たちの姿や声はわかるが、逆に中の出来事が外に伝わることはない。

だが、見えないといっても近くに恋人がいるというのは落ち着かない。流華は手で胸と股間を隠しながら蛙坂に、

「こんなところに呼び出して何を企んでいる。まあ、どうせ貴様のことだからろくな考えではないだろうがな。まったく、部長のわたしがサボりとは」

「そう怒らないでよ。罰ゲームまでの余興さ。面白いアイデアが浮かんだから試そうと思ってね」

「バケツに入っている液体のことか？　黒い……墨のように見えるが」

「惜しいね。これは媚薬入りのローションさ。色が黒いだけ」

「び、媚薬だと!?　性懲りもなく……」

思わず声を荒らげてしまう。また身体を弄ばれると思うと、肌が粟立つ。

「クフフ、キミにはこれで書道をしてもらうよ。トーゼン拒否権はないからね」

「っ……まあそれくらいしてやろう。だがなぜ裸になる必要がある。みんなが近くにいるというのにこれは……見えなくても恥ずかしいぞ」

つい小声になってしまう流華に、蛙坂はしたり顔

登場人物紹介

建宮流華

日本対魔協会に所属する戦姫。「装刃戦姫サクラヒメ」に転身し、人に仇なすオニグミを滅殺する

鬼蛙

オニグミを束ねる幹部。蛙坂蔵夫という名で流華と同じ学園に通い、彼女を徹底調教する。

三城良平

流華の幼馴染みにして恋人。戦闘能力はないが、彼女を精神的に支える心やさしき少年。

前号までのあらすじ　人に仇なすオニグミと戦う装刃戦姫サクラヒメこと流華。対魔協会最強と謳われていたが、鬼蛙の罠にかかり敗北してしまう。股間にペニスを生やされ、地獄のようなフタナリ調教を強いられるのであった……。

著者近刊　『天煌聖姫ヴァーミリオン　フタナリ調教されちゃう母娘ヒロイン』　好評発売中！

で内容を告げた。ドロドロとした嗜虐心が昂り、オニグミの本能が顔を出す。
「ただし、筆の代わりに使うのは股間のチンポさ。それで半紙に文字を書いてもらうよ」
「ばっ、ばっ、馬鹿！　ふざけるのもいい加減にしろっ！　ペニスで書道だと⁉　そんな恥知らずな真似できるか！」
「断るなら封鎖結界を消しちゃうよ。良平くんたちに裸を見られてもいいのかな？　部長がいきなりヌードで登場したらさぞみんな驚くだろうね。建宮流華は露出狂の変態だって学園中に広まるよ？」
「またそうやってわたしを……くっ、わかった。やればいいんだろう」
「素直で助かるよ。それとボクの質問に答えながら書いてね。ああ、射精したら始めから書き直しだから頑張って」
「このクズが」
乙女の怒りもどこ吹く風で、蛙坂は壁に半紙を貼りつける。
（んっ……ヌルヌルして気持ち悪いな）
流華はガニ股になりながら、皮を剥いたペニスをローションに浸した。粘液の冷たい感触が背筋を震わせる。ピンクと黒が混じり合った亀頭は、熟れた果実のようだ。
変態的なシチュエーションが感度を高め、豊乳美少女の被虐体質を煽る。
（チンポで文字を書くなんて、次から次へとよく思い浮かぶものだ）
股間を突き出し、ガニ股の姿勢で包茎チンポを勃起させる。たわわな豊乳をプルンップルンッと上下させながら半紙に近づく。
蛙坂は期待に剛直を膨らませながら、最初の質問をした。
「一つ目。キミはボクの何かな？」
「め、めす……雌奴隷だ……」
不格好に腰を振りながら『めすどれい』と書いていく。亀頭に半紙が擦れてこそばゆい。
コシュッ♥　コシュッ♥　コシュコシュ♥
「んっ、くうぅ……なかなか難しいな」
媚薬のエキスがジクジクと染み込み、肉竿や金玉が熱を帯びる。頬の赤みが増し、吐く息がだんだんと湿り気を帯びていく。
「クフフ、その調子だよ。もっとお尻を振ってくれると嬉しいんだけど」
「はぅっ、ひくうぅぅ、ぅ……ジロジロ見るな！　エロ蛙が！」
水蜜桃のようなヒップを弾ませ、一文字一文字書いていく。自分の陰茎を筆代わりにするというありえない恥辱行為に背筋が痺れる。
「んんっ、はっ、ひうぅぅぅん、はくうぅ……書けたぞ。これでいいか」
「へえ、上手だね。授業でも綺麗にノートをとっているけど、チンポも達筆なのかな？」
「し、知ったことか。それより次はなんだ」
「二つ目。いつもアヘアヘよがっているけど、装刃戦姫ってマゾの変態なの？」
「そんなわけがあるか！　装刃戦姫は人の世の平和を守るために戦っているんだ！　侮辱するのも大概にしろ！」
「ボクが気に入らない答えも書き直しだよ？　この結界を破るなんて、障子紙に穴を空けるより簡単なんだけどな」
「わかった……装刃戦姫はマゾの変態……集団……だ」
屈辱的な言葉を吐かされ、『マゾ変態』と字を書くマゾ乙女。媚薬の効果か欲情が大火のように燃え盛り、はしたなく射精をしたくなってしまう。
「あっ、くぅんっ……まっ、マゾの……変……態……ひっうぅぅぅぅ……書けたぞ」
「三つ目。一番感じるところは？」
「おチンポだ……フタナリの包茎チンポ。毎日シコっているスケベチンポだ。お……お……チ……ん……ぽ……」
「チンポを使ってチンポって書く人間は初めて見たよ。恥ずかしくないのかな？」
「一体誰のせいだと……あぐうう、亀頭が擦れて……ち、チン……ぽぉ……」
休む暇なく淫らな言葉を書かされる。懸命に腰を振る姿は、ストリップ劇場でも見られない淫靡さで、男の視線を虜にしてしまう。
白い肌に玉のような汗が浮かび、雌の匂いが結界内に満ちる。
「四つ目。チンポから出る白い液体は？」
「……ザーメンだ。わたしの早漏チンポからみっともなく噴き出す濃厚種付け汁だ……ふひゅっ、んんっ！　んくっ……ざ……あうっ！　ザ……メ……ン、ひゃうんっ！」
「ずいぶん息が上がってきたけど大丈夫？　まだ序盤だよ」
「こんなこと……屁でもない。ザ……は、ああ、くうぅぅぅ……メンできたぞ」
フタナリペニスが半紙に触れるたびに、屈辱電流が尿道を走る。ざらざらとした紙の繊維がムケ亀頭を愛撫し、絶頂が迫ってくる。
「五つ目。ザーメンはどんな匂い？」
「く……臭い。生臭い……ああ、はあぁぁあっ！　栗の花みたいな匂いだ」
「ウソはよくないよ。本当はもっとえげつない匂いなんじゃない？」
「はあ、くぅっ、んあああ……そうだ……臭い！　臭い臭い臭いいっ！　すごくイカ臭いんだ！　ひぅっ、うぅ……は、鼻が曲がりそうなくらいイカ臭い

んだ！」
「キミの腋の匂いと同じレベルなのかな？　電車に乗った時もすごかったよね」
「っくうぅ……ティッシュにくるんでもプンプンに匂ってしまう激臭ザーメン……ゴミ箱を妊娠させられそうなこってりザーメンなんだ。わ……わたしの腋臭同様くさいザーメンなんだ！」
「じゃあ流華の『激臭ポコチン臭』って書かないとね」
腋毛を生やされた罰ゲームのことまで馬鹿にされる。腋臭を貶められ、乙女の身体がカッと熱くなった。
「覚えていろ……り、流……華の……はあっ、おチンポ熱いいぃぃ！　おチンポ痺れる……ひぐぅうう うぅうっ！　半紙で感じてしまう……」
獣めいた嬌声が喉の奥から搾り出される。チンポ書道で誇りを貶める黒髪ヒロイン。
勃起肉竿だけでなく金玉下のクレヴァスからは淫蜜があふれ出し、床をはしたない染みで汚す。
ビクンビクンッと跳ねる股間のチンポ筆は、ローションで淫猥にぬめり毒虫のようだ。
（惨めすぎる……わたしの身体をなんだと思っているんだ）
女性どころか男性でもするはずのない下品さに、端正な小顔が引きつる。自分の精液がいかに汚いか思い知らされるようで、涙が出そうだ。
「おい、もっと声出せ！　部長がいないからって手を抜くなよ！」
「はい！　いち！　にい！」
そうしている間も竹刀を振る音と、気合いの入った声が聞こえてくる。真面目に部活をしている部員たちの姿がよけいに恥辱を煽る。
日頃さんざん「何があってもサボるな。一生懸命打ち込むことが上達の近道だ」と説教しているのは、他ならぬ流華なのだから。
彼らには知る由もないが、張本人は部活をサボって変態行為の真っ最中だ。
（情けない情けない……うぅ、チンポでこんなことをさせられるなんて……バカみたいだ）
淫辱に肉体が疼き脂汗をかく。射精欲求が限界まで高まり、肉竿も金玉もパンパンだ。
バケツに陰茎をひたすたびに、脳髄が焼き切れるような灼熱を感じる。股座はあふれる蜜液で大洪水だ。濃い目の陰毛がヌラリと光る。
コシュ♥　ズチュ♥　ヌチュルン♥
「六つ目。流華のチンポはいつも皮をかぶっているけど、実際は何包茎なのかな？」
「そ、そんなこと知るか！　興味もない！」
「淫乱ドスケベのキミなら当然調べているはずだよ。はいはいっはいっ、建宮流華部長は何包茎なのかな～？」
「鬼畜め。か、か……け……だ……」
「聞こえないな。もっと大きな声でよろしく」
「か……ほ……け……だ。これでいいだろ！」
「全然聞こえないね。もう一回」
「ぐうぅ、くっ……かっ、かか、仮性包茎だっ！　いつも亀頭が包皮に覆われている仮性包茎だ！　わたしのチンポは皮かむり早漏チンポなんだ……あっ、はうっ……チンカスの溜まりやすい不衛生チンポで、すぐにイッてしまう敏感チンポ。んっ、むううぅ……サイズだけはデカいのにすぐ屈服してザーメン発射してしまう情けないおチンポなんだ！」
「へー、そうなんだ。知らなかったよキミが仮性包茎だったなんて。それじゃあ『仮性包茎』って書いてみようか」
大きな声で皮かぶりを告白させられる。マゾ調教された肉体のおかげで、言葉の端々にせつないものが滲む。恥垢が溜まりやすく、匂いもキツいフタナリ包茎は、巨乳に次ぐ流華のコンプレックスになっていた。
（誰のせいで包茎チンポになったと思っているんだ。毎晩手入れするのも大変なんだぞ）
強烈な射精衝動だけでなく、恥垢の掃除が黒髪乙女の精神を擦り減らす。ボディソープを大量に使って匂いを消さなければ、学園に通うこともできない。
（とにかく今は書かないと。ほ、ほう……け……い……）
切れ長の瞳を恥辱で染め、再び腰を振る。快美波動に冒されながら、亀頭を走らせていく。
シュシュ♥　ズリジュリ♥　ズチョチョ♥
「はぁんっ……♥　仮……っん。うぅっ、んっ、んんっ……チンポせつないぃ……勃起が止まらないいぃぃ……」
グロテスクな血管を浮かび上がらせながら、文字を書く。傍から見れば尻を上下さえ、誘っているように煽情的な光景だ。尻タブがブルンッブルンッと揺れる光景は、むしゃぶりつきたくなるほどエロティックだ。
アナルも歓喜に盛り上がり、花が咲くように紅く膨らんで、甘酸っぱいフェロモンを放出していた。蠱惑的な淫臭が狭い結界内にたちこめ、理性を蕩かしていく。
「みんな真面目に打ち込んでいるね。ここにチンポで書道しながらセンズリ扱いてる変態がいるなんて思いもよらないだろうね」
「くぅ……そんなこと言うな……せ、い……ふうぅうん、わたしは変態じゃない。断じて変態じゃないぞ！　これは無理矢理やらされているだけだ……チンポ書道で感じてなんかいない！」
「だったら本当に感じていないか試してみようか。おーい、みんなー！　ここに建宮部長がいるよー！」
「えっ、えええええええ!?」

蛙坂は一時的に結界の機能を弱め、声だけを外に伝えた。部員たちにざわめきが広まる。
「今部長の声がしなかったか」
「俺にも聞こえたぞ。な、良平？」
「はい。ちょっと見てきます」
良平は手を止めると、声の聞こえた方向に歩き出した。
建宮部長が絶賛チンポ書道をしている場所だ。恋人の接近に黒髪乙女の顔が青ざめる。煽情的なうなじを冷汗が流れ落ちていく。
「ヒッ、ひいいいいい！　やっ、いやだあああぁあぁあああぁあ！　たっ、頼む良平こっちにこないでくれ！」
「ほら腰が止まってるよ」
「ひぅっ、ほっ、ほっ、ほ……うけ……あひぃんっ！んアァアアアッ！」
キョロキョロと辺りを見回す良平。外からはわからなくても結界の内側からは丸見えだ。
恋人の眼前で全裸になり、肉竿を黒色ローションに浸し、金玉をぶらぶら揺らしながらフタナリチンポ書道に励む。学園では古風で厳格、剣の腕も一流な建宮流華の姿。
どこからどう見ても頭のおかしい変態女である。もし気付かれたら二度と登校できないどころか、外を歩くこともできない
しかし、どんなに屈辱を味わわされても、蛙坂の命令には逆らえない。ロングの黒髪をしなやかに揺らし、肉幹で線を引く。恋人の命を守るために。
コシュ♥　ジュシュッ♥　ゴシュゴシュッ♥
「あんっ、はぁんっ！　りょっ、良平ダメだ……きちゃダメ……ひぐっぅ♥　はぁあ……ああんっ♥ひあああん♥　顔見えてる……良平がすぐ近くにいいいいい♥」
羞恥快美に心を蹂躙される。カリ首からしたたり落ちるローションが卑猥だ。
「んっ、あっ、あぁあぁん♥　け……け、かっ……書けないいいいい！　あひっ、あひイィィィィィィィィィィィ♥　で、でるでるぅ♥　おチンポでるぅぅぅぅ♥　ザーメンでてぢまうぅぅ♥　良平がそこにいるのにいいい♥　あぅヴんんん♥」
極限まで感度の上がったチンポを、ズリズリと半紙に擦りつける。背徳感が胸中で渦巻き、さらにリビドーを増幅させる。
「おかしいなー。たしかに流華の声だったんだけど」
「ヒゥッ♥　やっ、イヤアァァ……♥　良平……ああぁ♥」
二人の目線が重なった瞬間、一気に快感ゲージが上昇した。鮮烈な羞恥と快感が肉竿の秘奥を刺激し、頭の中が真っ白になる。
ずっとお預けをくわされていた包茎チンポはついに精を爆発させた。
ビュビュク♥　ブッビュル♥　ドブビュルウゥゥゥゥゥゥ♥　ブブ♥　ボジュル♥
「おっほおおおぉぉぉ♥　イグッ♥　イグッ♥おチンポ書道でイグうううぅぅぅ♥　半紙にくっさいザーメンだしまくる♥　ザーメン文字♥　ザーメン文字♥　ザーメン文字♥　ザーメンで文字でイッくのっおぉおおぉぉぉ♥　包茎チンポミルクで半紙汚してしまうううう♥」
ぶぴっぶぴっと半紙を白濁液で汚す筆チンポ乙女。刀の扱いは手慣れていても、筆チンポの扱いはまだまだのようで、白目を剥きながら恋人の前で果ててしまう。
「何もないですね。気のせいだったみたいです」
良平は部活へ戻っていく。すぐそこに恋人がいるとも気付かずに。
蛙坂は満足気にその光景を眺めていた。精液でドロドロになった半紙をつまみ取ると、
「もう一度始めからだね。仮性包茎からいこうか」
「はぁ……ううぅ」
流華はおぼつかない足取りで、陰茎を持ち上げる。チンポを黒ローションにまぶし再び勃起させる。壁に貼られた半紙に亀頭を向け、『仮』の文字から書き直した。
一時間後。
流華の足元には淫語の書かれた半紙がうず高く積み上がっていた。枚数は百枚以上にも及び、太腿がつりそうだ。
（はぁはぁ……これだけ書いてもまだ部活が終わっていない。封鎖結界の内外で時間の流れを歪めているのか。まったく面倒なことを）
時間すらも操る八大鬼（はちだいき）の呪力。強大な力に装刃戦姫は歯噛みする。いかに鍛えられた彼女でも、流石に体力の限界が近い。
「蛙坂……はぁ、少し休ませてくれ」
「もうヘバったの？　チンポの鍛え方が足りてないんじゃない？」
「調子に乗るな媚薬のせいだ。薬で女を屈服させるなんて恥ずかしいと思わないのか」
「やれやれ仕方ないね。どうしようかな」
蛙坂は大げさに肩をすくめる。そこで、部員たちの会話が聞こえてきた。どうやら休憩中のようだ。
「良平、建宮部長とは上手くいってるのか？　この間デートに行ったんだろ？」
「はい副部長。相談に乗ってもらってありがとうございます」
「マジかよその話！　詳しく聞かせろよ～」
「私も興味あるな」
良平は照れくさそうに頬をかきながらデートのことを話しだした。部員たちは興味深そう聞き入っている。厳格な姿しか知らない彼らには、想像もつかない未知の世界だ。

淫魔を狙う牡の喜び――

あーやだやだ
だから退魔師って
嫌いなの

人の食事を
邪魔してばっかり
マナーってのを
知らないの？

ピチャ

ゲシッ

ゲシッ

名乗る礼儀くらい
見せなさい

面白いわ

愚か者

できるものならやってみなさい！

ゴォォォッ

ドドドドッ

ザッ

ッ……！

ドォォォッ

バサッ

あら可愛い退魔師だこと

あっははは
ははは！

この程度の攻撃魔法
痛くも痒くもないわ！

さぁ どう
料理してや…

!?

うまくいった
みたいですね

な 何よこれ!?

ムク…

ムク…ッ

私のクリが
膨らんで…！

ひっ

オルウ

ぼろんッ

やっ!!
あぁぁぁ あぁッ!?

ビクンッ

ビクンッ

魔力に比例して
随分醜いのが
生えましたね

なんで私の体にちんぽが…

体中から力が抜けて…動けない！

陰茎生成魔術に魔力吸収効果を付加しましたよく似合ってますよ

ブル

ブル

どうですか？

今までシゴいてきたものを生やされる気分は

黙れ！

こんなもの生やしてッ…あっ

クニ

クニッ

こ…殺してやるッ

ムギィ

んッあぅっ!!

ズ…

おッあぁラッ

ズルンッ♥

ビクッ

ビクッ

指も動かせないのにどうやってボクを殺すんです？

皮を剥いただけで無様に喘いで…

煩いッやめろぉ！

そんなに感じて
この先耐えられるん
でしょうかね

悔しい…！
こんな奴に好き勝手
されて…
皮を剥かれただけなのに
凄い快感…

はぁっ

はぁっ

ジュッ

あっ

やっめ

ジュッ

ジュッ

ぶるんッ

あっ

ジュッ

ちょっと擦る
だけでこんなに
汁が溢れて

ぢゅっ

ぢゅっ

ひづっ

ほら

ぐリいっ

やばッ
先っぽはダメっ

やめッ

ちんぽッ
敏感すぎぃ！

ビクッビクン

ちゅっ

ちゅっ

ちゅっ

先走りの
やらしい臭いが
プンプンしますよ

ムワァ

も…ッ もう
触るなぁ！

あ…待って
ドクン ドクン
やだなんかちんぽムズムズして
シュッ シュッ
今まで散々搾り取ってきたものじゃないですか
パシュッ
あぁッ
まさかッ…射精するの!?
ドクンッ…
ふぁ…ッ
あーあもう出ちゃうんですか
ビュルルルル
ビクンッ
ビクン
何これ…男って射精でこんなに気持ち良くなってたの…!?
あぁぁぁぁ♥らにこれぇッふぅぅぅう♥

勃起が漲るごとに響く鈴の音――

生やされた怒張で快感を貪る艶舞！

奴隷舞姫メイラン

双悦の散華

小説 NOVEL／冬野（とうの）ひつじ

挿絵 ILLUSTRATION／はらいた

その少女の剣舞は美しかった。
情熱的な旋律に合わせて縦横に動きながらも、足捌きは流れる雲のように静かで、束ねられた緋色の髪は春風に吹かれているかのように滑らかに波打ち、中庭に設けられた円舞台は、観客達の目にはまるで果てしなく広がっている大地のようにすら見えていた。
剣を握る指先は白く細く、華やかな衣装の下の細い腰つきは柳の枝を思わせる。雪のような頬だけは薄く桃色に染まっているが、柘榴の瞳はひんやりとした光を湛え続けていた。
酒宴の場は、今は、ぴたと静まり返っていた。聞こえるのは、テンポを高めていく二胡の音色と、幽かに鳴る衣擦れの音だけ——。
剣舞の精とまで呼ばれているこの舞姫の名は、しかし宮中では口にする事は禁じられている。
やがて楽曲が止むと、少女は正面の席に向かって音もなく叩頭拝を行った。ようやく観客達が夢から覚めたかのようなざわめきを上げた。
『流石は央国一の舞姫だな』『異民族の血が入っているとは聞いていたが、つくづく美しい』『だが今は……』
少女は客席には一瞥もくれずに無言で剣を納め、舞台を降りると待ち構えていた官奴達と共に中庭を後にする。
『謀反人の娘の癖に』『汚らわしい淫売……っ、恥を知りなさいよ！』
今度は松明の明かりが届かない薄闇の向こうから、幾つもの視線と、はっきりと聞こえる囁きが突き刺さる。先に出番を終えていた女官達だ。
（私は、何も恥じるところはない……）
毒々しく鼻腔に入り込んでくる胡粉と紅の匂いを押し退けるようにして、少女は五彩の装飾を施された廊下を通り過ぎた。狭い通路を通り抜け、更にその先、地下へと向かう暗い石段を降りていく。黴臭く湿った空気が身体を包む。
「入れ」
乱暴に肩を押されて、少女は穴倉のような居室に戻された。
そう、華やかな衣装一枚を隔てただけで、この舞姫もまた、彼らと同じ、皇帝の奴隷に過ぎなかった——。
一年前、寝苦しい夏の晩にメイランの運命は変わった。
不在の父の代わりに門扉を開けた少女を取り囲んだのは、皇帝直属の兵士達だった。
（謀反など、父上は絶対になさらない！　何の野心もなく、荒れた土地を実り豊かにする事だけに心血を注いでいたのに……！）
皇帝の遠戚であるというだけの理由で父は謀反に巻き込まれ、斬首された。そしてただ一人残されたメイランにもまた、死罪が言い渡された。
そんな彼女の助命を嘆願したのは、従姉であり、宮中に召されて妃の女官となったイーリンだと聞かされている。
（イーリン姉さま、今、どうしていらっしゃるのだろう……？）
初めて会ったのは、八つになる頃だったか。広大な塩湖の畔に建つ城に、彼女はいた。
成人の儀の前だというのに、イーリンは既にどの大人達よりもずば抜けて美しかった。花嫁修業として預けられたメイランに、詩作と裁縫を教え、晴れた日には丘に登って花冠を共に作った。男兄弟に囲まれて育った少女にとって、城はまるで仙界で、美しい従姉は仙女のような存在だったが、そんな日々も戦と兄達の死によって突如終わりを告げた。
（あれから十年……お会いしたい！　命を救ってくださったお礼を……！）
皮肉な事に、次期当主として父に叩き込まれた剣技がメイランを稀代の舞姫に生まれ変わらせていた。月琴の哀愁を帯びた調べでも、二胡の情熱的な旋律でも、即興の小曲にでも、少女は完璧な舞を披露した。
（でも、姉さまの舞に比べれば、私の舞など……）
囚われの身を甘受した訳ではない。勿論、このまま飼い殺されて朽ちる気など毛頭なかった。
（こうして帝の前で舞っていれば、いつかは申し開きの機会もあるはず……せめてお妃にお目通り願えれば、なんとしても父上の名誉と、一族の復興を……それが叶わぬ時は……！）
深瞳の奥で、強い光が揺らめいた。
（だから、これしきの屈辱……耐えてみせる……！）
僅かな自由のひととき、蝋燭の明かりの中で、奴隷剣姫は決意を新たにするのだった。
それから数日後、メイランが連れ出された中庭は、日頃とは様相が違っていた。円舞台だけが煌々と照らされ、楽団の姿もない。周囲にいるはずの観客達の姿も、ぼんやりとした輪郭しか見えていなかった。
（空気がおかしい……それに私のこの衣装、丈が短すぎてまるで娼婦みたいにはしたない……）
いつもより明らかに露出の多い衣装を着せられた舞姫は、剥き出しになった太腿を気にしながらも目を凝らし、違和感の元を探す。地下室暮らしで闇に慣れた眼は、すぐに薄暗い観客席に吸い寄せられていた。
（あれは……イーリン姉さま!?）
盛装した皇帝と妃の後ろに、女官姿のイーリンが控えていた。手練れの職人が心血を注いで刻んだ象牙細工のような眼鼻は思わず手を伸ばして触れたくなる程の繊細さだ。
（間違いない！　ご無事だった！）
少し大きめの瞳も、結い上げられた黒髪も、昔と変わらない。
（でも……何かが違う……？）
胸がざわつくのを感じながら、メイランは美しい従姉を凝視した。
（姉さまのお胸、あんなに大きかった……？）

著者近況　小学生の頃父親に連れられて敦煌という映画を観に行ったのですが、異国の王女様がヒロインだったはずなのに、キスシーンですごく気まずかったというのと何故か西田敏行さんの顔しか覚えていない事が判明しました。

女官服の胸元が、遠目から見てもはち切れんばかりに盛り上がっている。腰回りも強調され、以前はなかった妖艶さに少女は息を呑む。
（それに、これって……姉さまの匂いなの……!?）
それは熟れ切った果物の甘ったるさと、麝香のような、生肉のような、頭の芯を揺さぶるような強烈さを持った匂いだった。身体がじんわりと火照るような妖しい芳香は、間違いなくイーリンの方角から漂ってきている。
（姉さま……一体、何があったの!?）
少女の身体が、嵐の夜の小鳥のように震えた。
（それに、お妃も……あれは私の知っているお妃じゃない……！）
得体の知れない恐怖が爪を立て、心臓を鷲掴みにする。
「知っての通り、我が央国はダグル国より新しく妃を迎えた事により大陸全てを平らげる事となった」
聞き慣れた野太い声に、メイランはハッと顔を上げた。
（ダグル国？　妖術を使うという、あの辺境の国から……!?）
ならば前の妃は一体どうなったのか。女官達が慣習通り暇を出されたのだとしたら、イーリンは何故まだ宮中にいるのか――？
数々の疑問が一気に押し寄せ、少女は混乱を振り払うように首を振る。紅い髪がばさりと揺れた。
「ダグル国の神々は、皆その身に陰陽の調和を表した女神だと聞く」
麗しい筆頭女官は身じろぎもせず立ったままだ。まるで彫像のように。
「今宵はその陰陽の神々に、央国の新生を祝福させようぞ……！」
皇帝の声にこれまでにはなかった奇妙な熱が籠っている事に少女が気付いた時、
「はじめまして、可愛い舞姫さん」
すぐ目の前に金髪金眼の女がいた。
（そんな!?　気配を全く感じなかった……!?）
「私の名前はバイラ、央国の新しい妃よ……フフッ、よろしくね」
得体の知れない妖気を纏ったその女の話し方は、流暢だが、どこか耳障りだった。
「あ、貴女……っ、イーリン姉さまに、一体何をしたの……!?」
「あらやだ、そんなに怖いお顔をして……折角の可愛い衣装が台無しよ？」
品定めでもするかのように顔を覗き込まれ、少女は怒りで身体を震わせる。
「姉さまはあんないやらしい匂いなんかさせてなかった……む、昔は、あの頃は……っ、もっと蜂蜜や棗みたいな、いい香りしかしなかったのに……！」
女は低く嗤った。
「謀反人の娘の分際で他人の心配なんかして……所詮はまだお子様ね」
「他人なんかじゃない！　姉さまは私の……っ、命の恩人よ……っ！」
次の瞬間、メイランは舞台の端まで駆け寄り、イーリンに向かって精一杯身を乗り出していた。
「姉さま！　メイランよ！　私、姉さまのお蔭で助かって……！」
「控えなさい、帝の前よ」
駆け寄る官奴達を手で制して、妃は少女を舞台の中央に引き戻す。
「まだ分からないの？　イーリンは貴女のせいで退官できないのよ？」
「私の……せい……？」
思わぬ言葉に舞姫は目を見開いた。
（謀反人の親族だと言われて追放されたなら分かるけど……でも、姉さまは、才を買われたから、だからそのままお妃にお仕えできていたんじゃ……？）
「イーリンって、優しいのね」
戦慄く白い顎に、指がかけられる。ゾッとするほど冷たい。
「貴女が官奴となった以上は、自分だけが故郷に帰る訳にはいかない……どんな身分でもいいから置いて欲しいって、私に泣いて縋ったのよ……」
女が唇を動かすたびに、眩暈がするような妖気が少女を覆う。
（そんな……私のために……？）
ねっとりと頬を撫でられているのに、振り払う事ができなかった。
「だから、今のイーリンは貴女と同じ官奴なの……あんな格好をして私の傍に仕えさせているけど、女官なんかじゃない……貴女と同じ、人よりも価値のない……ただの喋るお人形よ」
女は反物の手触りを愉しむかのような手付きで、少女の肌を撫で回す。
（姉さま、私を庇ったせいで、こんな得体の知れない女の言いなりに……）
メイランは女を睨み付けた。
「姉さまの優しさに付け込んで、いいようにしたのね？　そんな女が央国の妃を名乗るなんて、許せない……！」
思わず口走った言葉だったが、後悔はなかった。
（私なら、まだどうなっても耐えられる！　姉さまだけは、宮中から……この女から解放させなきゃ……！）
「ふふ……ッ、羨ましいわ……」
金眼の女は、まるで不吉な三日月のようにその目を細めた。
「イーリンも、貴女だけは助けて欲しいって言うのよ……まるで互いを思い合う姉妹のようね……美しいわ」
スッと袖を振り、何かを取り出す素振りを見せる。牛の角を象った金色の盃だ。
「でも……もう心配いらないわよ」
（どういう意味？）
眉を顰め、メイランは女の真意を探ろうとする。
「これから行う出し物で貴女が勝てば……二人とも故郷に帰してあげる」
「……っ!?」
少女の心臓が、大きく跳ねた。
（私も、イーリン姉さまも、ここから出られる……!?）
盃から立ち上る薬草の青臭い匂いには胡乱さしか感じられない。
（この女は妖術使い……恐らくは帝もこうして篭絡して……）
耳元で聞く囁きはまるで呪詛だ。だ

著者近刊　『欲望特急　スレイブバーサー搾精捜査』『交配惑星　エイリアンに娶られし少女戦士達』『魔法少女は背徳の檻で淫らなフェアリーテイル』、二次元ぷち文庫でも『とろけるいもうと　柚乃の秘蜜』『セレブ母娘飼育日記』など公開中！　好評発売中！

あとみっく文庫の人気作が
分岐小説で登場！

小説1～3巻 好評発売中！

『正義のヒロイン姦獄ファイル』
にてコミカライズ連載中！

カースイーター
呪詛喰らい師
淫棒の地下闘技場

小説／蒼井村正（あおいむらまさ） 挿絵／或十せねか（あると）
NOVEL ILLUSTRATION

【シーン1】

「……ゼムリヤ・イリュージア、今度は何を企んでいる？」

夕闇迫る繁華街で、数十メートル前方を行く人影を尾行しながら、常磐城咲妃は小さくつぶやいた。

咲妃は、人の欲望に存在を歪められた神格、「淫神」を、その身を捧げて鎮める神伽の巫女として活躍しており、退魔師たちの間では呪詛喰らい師の異名で呼ばれている。

並みの退魔師では対処が困難な淫神を鎮めるために全国を飛び回りつつ、普段は、私立槐宝学園の生徒として学生生活を謳歌している。

そんな彼女が追っているのは、銀髪と褐色の肌が鮮烈な印象を与える、モデルのように整ったエキゾチックな顔立ちの美女であった。

女の名前はゼムリヤ・イリュージア。

咲妃とは因縁浅からぬ術者組織、「九未知会」のメンバーで、淫蕩極まりない性格の死霊使いだ。

（何が目的なのかは知らないが、私の前に姿を現した以上、捕えて洗いざらい白状させてやるぞ！）

強い光をたたえた視線でゼムリヤを睨みながら歩を進める咲妃の肢体は、学園の制服越しでもはっきりと判る、メリハリの利いたナイスバディであった。

Jカップはあろうかと思われる爆乳は、重力に挑むかのように突出して、制服のシャツを盛り上げ、細くくびれたウエストから続くヒップの量感は、爆乳に勝るとも劣らない。

誰もが羨むような極上プロポーションに加え、顔立ちも凛とした気品を感じさせる美貌の持ち主であったが、すれ違う人たちは、誰も彼女の容姿に気を留めず、無関心に歩み去っていく。

咲妃が自らの身体に施した、印象希薄化の呪印の効果であった。

いわば、自らにかけた一種の呪詛である。

咲妃の姿を目にした者は、その呪詛の効果で、彼女本来の容姿を認識できず、ただ、制服姿の女子学生が歩いている、という程度の印象しか抱かないのだ。

印象希薄化した咲妃とは対照的に、ゼムリヤは雑踏で目立ちまくっていた。

全身からエキゾチックな色香をムンムンと漂わせる褐色肌の美女は、いささか季節外れな、毛皮のハーフコートを羽織って颯爽と歩んでいる。

艶やかな毛並みをした、狼の毛皮を丸々一頭分使ったファーコートの前は大胆にはだけられ、オイルを塗ったかのように照り光る褐色の素肌にピッチリと密着したラバーブラに包まれた爆乳の谷間がチラ見えしている。

腿の半ばまでを覆った、黒いラバー素材のロングブーツが、牝豹のように優雅な足取りで路面を蹴る度に、色香を通り越して卑猥としか表現するしかない、エロチックブラウンの艶尻と、挑発的に盛り上がった淫乳がプルプルと躍動し、道行く人たちの視線を、老若男女関係無しに吸い寄せていた。

道行く人たちのあからさまな視線を全身に浴びるゼムリヤの口元には、淫猥な笑みが浮かび、街灯の光にきらめく瞳は熱く潤んでいる。

好色な褐色美女は、人々の視線に欲情しているのだ。

過剰なエロボディで通行人たちを魅了したゼムリヤは、雑居ビルの地下駐車場へと入ってゆく。

（地下か……ちょうどいい。人目がない場所に行った所で捕まえて問いただしてやる！）

咲妃は、恐れる様子もなく、褐色肌の淫蕩美女を追って地下駐車場へと足を踏み入れた。

その瞬間……。

「う……ッ!?」

うなじの辺りにゾクリ！　と悪寒が走り、呪詛喰らい師の異名を持つ退魔少女を小さく呻かせる。

「……今のは、何らかの術式結界に踏み込んだ時の感触……やはり、仕掛けてきたか」

罠に掛けられながらも、咲妃の口元には不敵な笑みが浮かんでいる。

物理法則が通用せず、意思疎通さえも困難な、幾多の淫神と対峙し、神伽を成し遂げてきた彼女にとって、こんな結界に踏み込むことなどは日常茶飯事なのであった。

「さて、鬼が出るか蛇が出るか……」

恐れる様子もなくつぶやく咲妃の前には、天井の非常灯にぼんやりと照らされた、鉄製の防火扉がある。

背後を振り向いてみるが、深い闇が広がるばかりで、さっき入ってきたばかりの地下への入り口は跡形もない。

「まあ、どちらにしても、厄介なことには変わりはないが、いかなる罠や呪詛も、すべて喰らい、鎮めてやるぞ！」

ためらいもなくドアを開け、淫靡な罠が待ち構えているに違いない場所へと踏み込んだ呪詛喰らい師を、まばゆい光と大歓声が包み込んだ。

「なるほど……こういう趣向か……やはり、厄介だな」

まぶしげに細められた咲妃の視線は、天井からの明かりで煌々と照らし出されたプロレスのリングと、観客席でざわめく人影を捉えている。

そこは、地下に造られた闘技場であった。

ライトアップされているのは中央のリング部分だけで、客席は闇に包まれているため、観客たちの正確な人数や顔ぶれは判らないが、ざわめきから判断すると、おそらく、数百人以上はいるようだ。

「レディースアンドジェントルメン！　お待たせしました。本日のメインイベンター！　その名も高き、カースイーターこと、常磐城咲妃、推参ッ！」

いつの間にかリングに上がっていたゼムリヤが、マイク片手に宣言すると、咲妃にスポットライトが当てられ、客たちの歓声が上がる。

「さーき！　さーき！　さーきッ！」

はじめの頃はまとまりのなかった歓声は、やがて割れんばかりの咲妃コールとなって、スポットライトに照らされた制服少女を包み込む。

「カモーン、カースイーター♪」

「ふぅ～、つくづく、ショーアップされたことが好きなようだな、ゼムリヤ……」
憂鬱げに眉をひそめ、大きな溜息を漏らした咲妃であったが、リング上で挑発的な笑みを浮かべて手招きしているゼムリヤをキッ！　と見据え、足早に歩み寄っていく。
エプロンサイドに上がった制服姿の少女が、トップロープを軽々と飛び越えてリングインすると、観客たちから、割れんばかりの歓声と咲妃コールが再び沸き起こった。
「私も、マイクパフォーマンスしていいかな？」
褐色の淫蕩美女に呼びかけると、ゼムリヤの顔に、意外そうな表情が浮かぶ。
「ああら、何だか乗り気じゃないの。いいわよぉ。思いっきりイッちゃって」
死霊使いの美女は、まるでペニスを愛撫するかのように、褐色の指を絡めてスリスリと扱き弄んでいたマイクを、咲妃に手渡してくる。
「では……ここで約束してもらうぞ。この勝負で私が勝てば、今後一切、槐宝学園周辺でうろつかず、生徒や関係者に手を出さないことを！」
凛とした咲妃の声が、マイクを通して増幅され、会場内に響くと、騒いでいた観客たちは水を打ったように静まり返った。
呪詛喰らい師の声に含まれる、並々ならぬ気迫に圧倒されたのだ。
「……いいわよ。ガチンコ勝負で、受けてやろうじゃないの！」
咲妃にマイクを向けられたゼムリヤが応じると、口笛と歓声が沸き起こり、会場に喧噪が戻ってきた。
「さあて、皆様ご期待の、本日の試合内容は、メインイベンターである常磐城咲妃本人に決めてもらいましょう！　選択肢は二つ。これだぁ！」
ノリノリでマイクパフォーマンスするゼムリアの宣言と同時に、リングの天井四方に設置された大型スクリーンに、「竿対決」「フタナリレスリング」という、どちらを選んでもろくでもない試合内容になりそうな選択肢が表示された。
「……はぁ～。内容を想像しただけで、頭がクラクラしてくるおバカな選択肢だな」
呆れ顔で溜息をつく咲妃の耳に、「竿勝負にしろ！」とか、「フタナリレスリング！」と連呼する観客たちの声がひっきりなしに飛び込んでくる。
「どうやら、ここにいる客たちも一見さんではなさそうだな？」
「ウフフフッ、そうよぉ。超自然的なエロエロを見慣れている、裏社会の人たち♪」
闇の奥でざわめいている観客たちを見回しながら、ゼムリヤは告げる。
「相変わらず、そんな連中とつるんでいるのか……。私が勝てば、ここにいる観客たちにもそれ相応の処置をさせてもらうぞ？」
「ええ。この会場にいるのは、いわゆる、人間のクズばかりだから、煮るなり焼くなり好きにしちゃっていいわよ。勝てれば……だけどね♪」
マイクオフの状態とは言え、ゼムリヤはとんでもないことを言い放つ。
「では、選ばせてもらうぞ……」
勝ち気な表情でスクリーンを見上げた呪詛喰らい師は、表示された淫猥な選択肢の一つを指さした。

竿対決。→シーン2 P.174へ

フタナリレスリング。→シーン3 P.186へ

【シーン2】

「竿対決で勝負してやろう！」
咲妃が高らかに宣言すると、フタナリレスリングを期待していた連中が上げるブーイングの声を圧して、淫らな期待に興奮した観客たちの歓声が会場内を包み込む。
「念のために確認しておくけど、竿対決の意味、判っているわよね？」
観客たちが下品に騒ぎ立てる声を心地よさげに聞きながら、淫らな死霊使いは確認してくる。
「当然だろう？　私を誰だと思っている？　それよりも、本当にガチンコ勝負なんだろうな？」
疑念たっぷりの目でゼムリヤを見ながら、呪詛喰らい師は問いかける。
くせ者揃いの九未知会のメンバーの中でも、最も信用できないのが、この褐色肌の淫女であった。
「もちろんよぉ。この勝負のために、アタシも『淫ノ根』をゲットしたのよ♪　すっごく硬くて、太くて、ビンビンに敏感で、絶倫なのを、ね♪」
毛皮のコートを脱ぎ捨て、ラバーブラとショーツ姿の褐色エロボディをさらけ出したゼムリヤは、自らの股間をまさぐりながら恍惚の表情を浮かべる。
「それじゃあ、準備しましょうか？　ンッ……あぁんッ♪　アタシの黒チンポ、待ちきれなくって、もう、ズリュズリュッて出てきちゃいそうよぉ」
褐色の太腿を擦り合わせ、切なげに腰を引いて身を捩りながらも、股間で蠢く指の淫らな動きは止まらない。
「……その淫乱さを、すぐに後悔することになるぞ」
数百人の観客の前で恥ずかしげもなく自慰行為に耽るゼムリヤに言い放った咲妃は、地下闘技場のスタッフに導かれるまま、リングを降りて控え室に向かった。
十数分後、咲妃とゼムリヤは、再びリング上で対峙していた。
咲妃の方は、神伽の巫女の正式コスチュームである深紅の革帯ボンデージ、対するゼムリヤは、この日のために用意したらしいエロチックなリングコスチューム姿だ。
普段以上に露出度と密着度を増したブラのトップ部分には、乳首の突起がこれ見よがしに浮き出し、レザーショーツのウエストラインは銀色の鋲で装飾されて、褐色肌とのコントラストが強調されている。
いつも羽織っている銀狼のファーコートの代わりに褐色ボディを覆っているの

著者近況　家の物置や、裏庭のコンクリート塀が相次いで老朽化して建て直し中。戦後すぐに建てた家らしいので、老朽化は仕方ないですが、予想外の出費が……。と、いうわけで、私の著作、お買い上げお願いいたします。

は、黒いエナメルレザー製のビザールコート。

魔性の微笑みを浮かべたエキゾチックな美貌と相まって、悪役の見本のようないでたちである。

後頭部で腕を組んだ体勢で向き合った二人の股間では、女性の身体には本来存在しないはずの器官が天を衝いてそそり勃っていた。

本来なら、クリトリスのある場所からグインッ！ と伸び上がった肉槍は、弓なりに反り返って硬く強ばった茎部分に浮き上がる血管や、先端で張り詰めた亀頭の形状まで、男性のペニスそのものである。

抑圧された性欲を抱えた女性に憑依する男性器型の淫神、淫ノ根だ。

欲情の高まりに反応してペニス化したクリトリスは、強烈な射精欲求で依り代の女性を苦しめ、禁断の放出快感に酔い狂わせてしまう。

神伽の巫女である咲妃がこの街に赴任し、最初に鎮めた淫神が、この、淫ノ根であった。

「どう？ アタシの黒チンポ、本物の淫神でしょう？」

今にも射精しそうなエロい表情で、ゼムリヤが至近距離から問いかけてくる。

「ああ。確かに、本物のようだな。しかし、自分から進んで淫ノ根の依り代になるとは、物好き……いや、淫乱極まりないな」

死霊使いの股間からそそり勃つ褐色の肉槍を見下ろしてつぶやく咲妃の目には、フタナリ勃起から渦巻きながら立ちのぼる濃密な神気が捉えられている。

「ンフフフッ、褒められたと思っておくわ。もっと酷い言葉で罵ってもいいのよ♪」

マゾ性癖のある淫乱褐色美女は、股間の黒勃起をヒクつかせながら舌なめずりする。既に勃起した二人のフタナリペニスには、極薄ラテックス素材のコンドームが装着されていた。

透明なコンドーム越しに艶やかな薄紅色の亀頭を透けさせた咲妃のフタナリペニスと、淫靡な紫色のコンドームに包まれたゼムリヤの褐色ペニスが、今にも触れ合いそうな至近距離で向かい合っている。

勃起しただけで、既に甘い疼きに襲われている淫肉棒の発する熱気が、お互いに伝わり、二人のセクシーボディが切なげに身じろぎしてしまう。

「ルールは簡単。手を使わずに、チンポ同士を擦り合わせて、精液でいっぱいになったコンドームが先に落ちた方の負けよ」

勝負を待ちきれないかのようにペニスをヒクつかせながら、ゼムリヤは言う。

「使っていいのはチンポだけ。手コキはもちろんのこと、素股や挿入は反則だから、気をつけてね？」

「本当に、心底おバカなルールの勝負だな……」

呆れ顔でつぶやく咲妃の頬は紅潮し、凛々しい美貌には、明らかな羞恥の表情が浮かんでいる。

リングの真上に設置された巨大スクリーンには、エロチックコスに包まれた二人の見事な肉体や、そそり立つフタナリペニス、対照的な表情を浮かべた美貌がアップで映し出されているのだ。

会場からは、咲妃の極上プロポーションや、初々しくもエロチックなフタナリペニスを賛美する卑猥なヤジがひっきりなしに浴びせ掛けられ、呪詛喰らい師の羞恥心を煽る。

もちろん、ゼムリヤの過剰なまでのエロボディや、恥知らずに怒張した褐色ペニスに対するヤジも飛んでいるのだが、元々淫乱な彼女の方は、かえって興奮を煽られているようである。

カァーンッ!!

ゴングが鳴ると同時に、どちらからともなく腰を突き出し、コンドームに包まれたフタナリ勃起が、ギュリンッ！ ときつく擦れ合った。

「ふぁ！」

「あはぁんっ！ カースイーターのチンポ、熱くって硬いわぁ」

ファーストコンタクトの瞬間、二人の上げた甘い声を、リング天井に設置されたマイクが拾い、増幅して会場内に響かせる。

「く……う……これは、想像以上に……ッ！」

勃起の芯をゾクゾクッ！ と駆け抜けた喜悦の電流に美貌を歪め、咲妃は呻く。

押し付け合った淫ノ根から発する神気が共鳴し合い、快感神経をビリビリと掻き鳴らして、想像していた以上に強烈な快感を湧き起こせていた。

勃起の奥にわだかまっていた射精欲求が一気に高まり、フタナリペニスの体積と硬度がさらに増して、そそり勃つ肉槍を包んだコンドームが、ギチッ！ と軋む音を立てる。軽く腰を引いて距離を取ろうとする咲妃に対し、ゼムリヤは……。

「あひぃんっ！ チンポッ！ フタナリチンポ同士ギュリギュリってするのって気持ちいいンッ！ もっとぉ、もっと押し付けてゴリゴリ擦り合いましょうよぉぉ！」

淫乱極まりない褐色美女は、色香の濃縮液のような声を上げながら、勝負の趣旨を忘れ去ったかのように、夢中になってフタナリ勃起を擦り付けてくる。

「くぁ！ まっ、待て！ そんなに強くしたら、お互いに……やっ、ヤバいぞ！ ひぁ！ んくぅ、この淫乱め！」

過激な擦り付けから腰を引いて逃げようとしても、突き出されてくる褐色ペニスの勢いが強すぎて、黒光りする亀頭がフレッシュピンクのフタナリ勃起にゴツゴツとぶち当たる。

圧迫感が変じたむず痒い愉悦が、腰が抜けそうな快感の波となってボンデージボディを駆け巡り、呪詛喰らい師の漏らす切れ切れの色っぽい喘ぎがリング上に響く。

「にっ、逃げちゃダメよぉ。ガチンコ勝負なんだから、ガチでチンポゴリゴリってしましょうよぉ。射精しちゃっても、コンドームが落ちなきゃ負けじゃないんだからぁ♪」

鼻にかかった色っぽい声で言いながら、さらに密着度を強めてくるゼムリヤ。

セクシーコスチュームに包まれた褐色淫女のバストが、白桃のような咲妃の爆

著者近刊 『呪詛喰らい師１～３』『ウィッチ＆エッチ　クールな魔女をマゾ調教してみた』『対魔忍ユキカゼ　対魔忍魔調教に堕つ』『超昂閃忍ハルカ　スバル虜囚魔辱編』『もののふガールズ１～２』他
好評発売中！

乳に押し付けられてムニュムニュとひしゃげ、股間では、極薄ラテックスに包まれた二本のフタナリペニスが勃起硬度とサイズを競い合うかのように、ギチュギチュと摩擦音を立ててせめぎ合う。
「くふ……ンッ！　んんんッ！」
「あはぁ、イッ、チンポいいわぁぁ～」
　唇を真一文字に引き結んで耐える咲妃の美貌と、褐色肌を汗に濡れ光らせて喜悦の喘ぎを漏らすゼムリヤの淫乱顔が、互いの吐息がかかる程の距離で左右に揺れる。
「いっ、いいぞぉ！　二人ともっとやれぇぇ！」
「もっとケツ振れ、ケツッ！　どっちもエロいぞぉ！」
　白く照り輝くような色白ナイスバディの美少女と、淫らを練り固めたかのような褐色エロボディの美女が、股間にそそり勃ったペニスを押し付け合って腰をくねらせる倒錯の極みのような光景に、観客たちは興奮した声を上げてはやし立てる。
「ンッ……くぁ……アッ……んうぅ、あはぁうっ……」
「はぁん、チンポチンポ、いいっ、ギュリギュリって擦れて、あひんっ、いいわぁ♪」
　キュルッ、キュムキュムキュム、キュムルンッ！
　咲妃の押さえた呻きと、ゼムリヤの明け透けな媚声のみならず、コンドームを装着したフタナリペニス同士が擦れ合う淫音までもが、天井マイクに集音されて会場内の空気を淫靡に震わせる。
「あふ……あぅ……く……きゅふうぅぅんッ！」
「んはぁぁん、イッ、いいわぁ、カースイーターのチンポがビクビクって震えるのが伝わってきて、アタシのチンポもビクンビクンいってるわぁ」
　擦れ合う肉茎から発した快感が股間を疼かせ、淫ノ根が切なげに跳ねる度に、淡いピンクに上気した咲妃の美尻と、ヌラヌラと照り輝くゼムリヤの淫尻が、キュッ、キュンッ、と緊張し、スリムに引き締まった互いの腹部に喜悦のうねりが走り抜ける様子まで、余すところなくカメラが捉え、大スクリーンに投影している。
　密着してひしゃげた白と褐色の爆乳がムニュリムニュリと互いの柔肉をこね回し、脇の下に噴き出た汗粒が照明にきらめきながら乳肉の丸みを伝わって流れ落ちてゆく。
　女性美の極致のような爆乳が揉み合う数十センチ下では、女体に本来存在しない怒張がさらに存在感を増してぶつかり、剣劇さながらに弾き合っている。
「こっ、このっ！　いい加減に、しないと……くうぅんっ！」
　がむしゃらに擦り付けてくるゼムリヤの腰使いをいなしつつ、呪詛喰らい師（カースイーター）はボンデージ裸身をくねらせて反撃した。
　前後の腰の動きは避けつつ、やや背伸び気味の体勢で左右に尻をくねらせ、突き出されてくる褐色ペニスの亀頭を勃起の胴部分で受け止めて、硬質な感触で先端部を責める。
　ぎゅにっ、グリッ！　ぐにっ、むぎゅるっ、ぎちゅるっ……。
　カースイーターの肉竿に、ゼムリヤの褐色亀頭が擦り付けられ、左右の揺らめきでじっくりと揉みこねられる。
　数分間にわたる攻防の末、やがて、咲妃の柔軟な腰使いがゼムリヤを圧倒し始めた。
「はひんっ！　いっ、アッ、あぁぁん、そこ、かっ、感じちゃうぅぅんッ！」
　眉根を寄せ、エキゾチックな美貌を歪めて、褐色肌の美女は喘ぐ。
「んっ……く……お前の感じる場所は、全部おぼえているぞ、ゼムリヤ」
　しなやかに腰をくねらせながら、咲妃は甘い吐息混じりに囁（ささや）きかけた。
　男の荒々しい腰使いとは違う、滑らかで優美とさえ言える尻の動きであったが、その股間からいきり勃った美少女の勃起は、ゼムリヤの褐色ペニスを的確に捉えて擦り嬲（なぶ）り、敏感極まりない怒張を絶頂へと追い込んでゆく。
「ひぁ！　なっ、なんで、こんなに一方的に……あひぃんっ！　らめぇぇ、そこっ、そんなにズリズリされたら、チンポ痺れるッ！　痺れるうぅぅ～ンッ！」
　逃げ場のない状態で呪詛喰らい師（カースイーター）の肉槍突きに翻弄されながら、ゼムリヤは込み上げてくる射精欲求に顔を歪めて嬌声（きょうせい）を上げる。
「くっ、ンッ……。以前、九未知会のメンバーに輪姦された時、お前は事細かにご奉仕の仕方を命令してきただろう？　たとえば、ここを。このリズムで擦られると……ンンッ！　お前はすぐにアヘ顔晒して射精していたな？」
　瞳にサディスティックな光を宿した呪詛喰らい師（カースイーター）は、歯切れのいい口調で言葉責めを繰り出しつつ、桜色に上気した肢体を小刻みに揺らす。
　ずりゅずりゅずりゅむにゅるっ！
　硬く猛った咲妃の肉柱が、ゼムリヤの亀頭を押し潰すように密着して上下に擦り立て、敏感な鈴口部分を割り開いて、射精穴の媚粘膜を犯している。
　咲妃の赤裸々なカミングアウトを聞いた会場からは、「おい、輪姦だってよ」とか、「その時の映像ないのか⁉」などという声が上がり、興奮度はさらに増していく。
「外野がうるさいな……。くぅ……とっ、とにかく、お前の急所はお見通しだッ！」
　観客たちのざわめきに気恥ずかしさをおぼえつつ、呪詛喰らい師（カースイーター）は、肉竿部分でゼムリヤの亀頭をこね回して攻勢を仕掛けた。
　ギュリッ、キュムンッ！　ヌチュヌチュヌチュヌチュルッ！
「あひンッ！　インッ、ひぁぅぅッ！　チンポの先っぽ、痺れるうぅぅンッ！」
　ゼムリヤのあられもない嬌声に混じって、先走りの溜まり始めているコンドームの先端部分に硬く張り詰めたピンクの肉胴が押し付けられ、鈴口のワレメを割り広げながら擦り嬲る音が、会場内に生々しく響く。
（強い刺激を避けているのに、擦り付ける度にペニスが疼く……。これが長引いたら私も危ない。早めに勝負をつけるぞ）
　自分は最低限の刺激で済むように、背筋を反らし、爪先立ちで身を預けた咲妃

おのれ楠葉(くすは)め！ またしても邪魔立てをいたすか!!
☆急々如律令
邪悪な妖かしとの闘い……挑むは美少女陰陽師！
妖かしあるところに陰陽師！
☆急々如律令
妖狐よ！ 今度こそ封じてやる!!
☆急々如律令
猪口才(ちょこざい)な
これでも喰らえい
ギュルッ
ギュルッ
くっ

陰陽師
安倍楠葉
～宿敵・妖狐 フタナリ淫辱の罠～
漫画 COMIC ぱふぇ
妖怪 化け狐
ですか ――
奴が峠に住み着いてもう三月
山を越えたければ酒をよこせ肉をよこせ
もう村には何も無え…
それは捨て置けないわね
この陰陽師安倍楠葉に任せなさい
この近くに出没する狐と言えば心当たりがあるわ
おお！心強い
幾度となく捕り逃した宿敵 妖狐
ごくん
ついに追い詰めた――！
ハハハハハハハ
などと大口を叩けなくしてやろうぞ！
ッッ!!

そなたとの因縁もここまでにしてくれる!
覚悟せよ!!
は!
何ィ!?
お前の術は対策ずみよ
悪事もここまでよ
泰山府君祭!
浄天地呪!!

退散
妖怪
石となり千年の眠りにつけ！
うおおおおおおぉぉ

お…
ア
体が…
く…なに…
痺れ…？
ッく!!
あはははははは！
お人好しなお嬢ちゃんめ
まんまとかかったわ
そなたに依頼した村人は
妾の雇った手下よ
一服盛られたのに気づかず愚かよのう
騙すなんて卑怯よ！正々堂々と戦え!!
きゃああああッ!!

小説 NOVEL／桃生雨京（ものううきょう）
挿絵 ILLUSTRATION／ぼんすけ
恥辱の二重奏
ふたなり姫と女騎士
美しき姫君を救うため
女騎士団長は剣を振るう！
容赦のない恥辱が二人を堕とす！

1

「やあああああッ!!」

気合の入った声と共にロングソードが一閃。月光も届かない深い森に響く、狼型の魔物の断末魔、そして飛び散る暗褐色の血。

（これで最後か？　他には――）

グランヴィル国女騎士団長、エリス・バートウィッスルは警戒を解かない。剣を中段に構えたまま、切れ長の目を左右に這わす。夜の闇、背の高い木々、無数の異形の死体。その間から、ボスと思しきひとまわり大きな魔物が躍りでた。

「遅いッ！」

身につけた甲冑をものともせず、長躯の女騎士は疾風の如く飛びだし、剣を横一文字に払う。魔物は声をだすこともできずに絶命した。

（今度こそ終わり……のようだな。周囲に魔物の気配はない。よし）

剣を鞘にゆっくりと収め、いつものクセでブロンドヘアーのポニーテールを撫でる。汗を吸ったのかやや重たく感じた。エリス特製の甲冑は胸部が大胆に開いている。豊かな乳房がつくる谷間はほんのりと朱に染まり、蒸れていた。甲冑の内に着ている襟詰の騎士服、機動性を重視した丈の短いスカート、ニーハイソックスも地肌にぴったりと張りついてしまっている。

（この程度の魔物に焦りを感じたのか、私が？　馬鹿な――……いや）

ゆっくりと振り返り、その場に片膝をつき、視線をあげた。

「お怪我はありませんか、姫さま」

エリスの赤い瞳に映ったのは、透き通るような青い目と、同じ色のロングストレートヘアーだ。

「ええ、大丈夫。エリスが護ってくれましたから」

小柄で童顔の美少女――フェリシア・リリーフロラ・グランヴィル姫が柔和に微笑んだ。町娘が着るような質素なワンピースを着て、フード付きのローブを羽織っている。普段の彼女とは真逆の姿だが、一国の姫君たる気品は少しも衰えていなかった。

（焦りじゃない……緊張だ。姫さまの護衛は、今、私ただ一人。少しの油断も許されない）

王直々の命を受け、エリスはフェリシアと共にある場所へと向かっている。大っぴらにできない内容がゆえに、多くの兵をつけられず、一騎当千と謳われた女騎士団長のみの守護隊となった。

（城の者や城下町の民に気づかれないよう夜にでたのだが、失敗だったか？　魔物の数が妙に多い。滅多にでないはずなのに……。とにかく、一刻もはやく目的地へ姫さまを――）

「……エリス、立ってくれますか？」

「えっ？　あ、はい……はわっ!?」

反射的に立ちあがった直後、女騎士の手は姫の掌に包まれた。それだけでなく、思いきり身を寄せてきたのだ。服の上からでは目立たない少女の乳も、密着するとたしかなやわらかさがある。つむじから立ち昇る甘い香りが鼻をくすぐった。

「なっ、なんですか姫さまっ!?　お躰が冷えたのですかっ？　それならば私のローブをお貸しいたしましょうっ！」

予想もしていなかったフェリシアの行動に、エリスは激しく動揺する。

（ああ、なんて小さなお手っ！　とても滑らかで傷ひとつない！　それに、どこもかしこもフニフニとして……！）

淫らな感情が湧いてくる。下着の内側に熱が溜まり、切ない疼きを覚えた。

「寒くなんてないです。それより、わたしがいったことを忘れたのですか？」

女騎士にくっついたままの姫は上目遣いで訊ねた。

「と、おっしゃいますと……ええと？」

記憶を探ったが思い至らない。真剣な面持ちのフェリシアにじっと見つめられ、エリスはおおいに焦った。そうしている間に彼女の頬はどんどんふくらんでいく。最後は破裂し、大きな声が飛んできた。

「もうっ！　二人きりのときは、昔みたいにしてっていったでしょうっ！」

「あっ！　それでしたか！　い、いや……しかし、ですね……」

昔みたいに――それは十年以上前のことだ。まだ己とフェリシアの立場を明確に理解しておらず、四歳下の彼女を妹のように可愛がっていたのだ。

（姫さまを呼び捨てにして、冒険ごっこをしたり、私の稽古に付き合わせたりまでして……畏れ多いことをしていたものだ）

二十歳となり、騎士団長にまでなった現在、仕える姫に過去のような態度をとれるわけもない。

「申し訳ありません。それはできかねます。どうかご理解くださいませ」

主の肩をそっと押し、エリスは再びその場に膝をついた。返ってきたのは重く長い沈黙。百の言葉よりも堪える、無言の訴えだった。

「いじわるえりす」

昔、フェリシアを泣かせてしまったとき、彼女がよく呟いた言葉だった。

「……しかたありませんね。無理をいいました。忘れてください」

顔をあげるとそこにはやわらかな微笑み。が、エリスは見ていた。一瞬だけ、美少女の双眸に光るものがあった。

（……ごめんね、フェリシア。本当なら私だって、昔みたいに――）

女騎士は首を左右に振り、立ちあがる。これ以上考えると、今度はこちらが涙してしまいそうだった。

「姫さま、まだ歩けますか？　急いだ方がよさそうです。森が異常に騒がしいのです」

真剣な表情でそういうと、フェリシアも口元を引き締めて頷いた。

「わかりました。わたしは大丈夫です。すぐに出発――あッ！」

「姫さまッ!?」

少女が短い悲鳴を漏らし、躰を折り

曲げた。エリスは彼女の方へ両手を伸ばし、小さな肢体を抱きとめた。慎重に両膝を地面につける。

「き……きてしまったようです。あれ……です。発作……です」

頬が濃い朱に染まっている。瞳はふるえ、濡れた唇からは乱れた吐息がこぼれていた。そして、彼女の股間から何かが反り勃ち、ワンピースを凸型にふくらませている。

（ああ、姫さま……！　それは発作ではなく、正確には……ぼ、勃起です）

苦しげな主を見つめながら女騎士は唇を噛み締める。

（許せない！　いったい誰が、こんなおぞましい呪いを姫さまに……！）

フェリシア姫が突然ふたなり化してしまったのは一週間前。王はその治療をさせるため、国のお抱え魔法使いカラムを城へと召喚。人嫌いな性格ゆえに、彼は森深くに居を構えていた。しかし数日経ってもやってこない。その間にも、少女の肉棒は牡っぷりを増していき、日に何度も屹立するようになった。痺れを切らした王は、フェリシアを魔法使いの下へ連れていくようエリスに命じたのだった。

（本当ならば私一人が様子を見にいけばよいのだが……姫さまの容態はもう限界だ。これ以上悪化したらどうなってしまうかわからない。危険極まりないが急ぐしかない。しかし――）

「姫さま、今晩はここに野営をしましょう。その状態ではとても……」

「だ、だけど！　ううンっ……！」

姫が悩ましいうめき声を響かせる。折れてしまいそうな程細い腰が、女騎士の腕の中でよじれた。

（……アレがとても敏感になっているに違いない）

十センチにも満たない男根がワンピースの内側で脈打っている。野卑なシルエットから視線を逸らし、フェリシアを安心させるように微笑んだ。

「私が寝ずに姫さまをお護りします。それとバルタザルから聖域生成の魔具を預かっています。これを使えば、半径二十メートルは魔物たちが近づけないそうです。ですので、どうか……！」

「わかり……ました。エリスに任せます……あンぅ！」

嬌声がこぼれ、未成熟な躰が波打つ。ペニスの先端から汁が溢れているようで、牡テントの先端にシミができていた。

（はやく野営の準備をしなければ。まずは聖域をつくろう。あの男の道具など、使いたくもないが……）

女騎士の脳裏に浮かんだのは汚らしい黒髪長髪の中年男性だ。グランヴィル国にはもう一人、バルタザルという魔法使いがいる。腕はたしかなのだが、素行が悪く、度々問題を起こしているので信用されていない。今回の命令も、彼には姫のふたなり化の点だけは伏せられていた。

（まあ元より、男に話せる事柄ではないのだが。……ええっと、使い方はこの先端を地面に当て、呪文を唱え、九十度まわす……だったな）

魔具は手の中に収まるサイズで鍵の形をしていた。魔法使いから教わった手順を踏む。すると、暖色系の淡い光がドーム状に広がり、二人と周囲をすっぽりと包んだ。魔物の気配を感じなくなった。

（素直に認めるのは癪だが、大したものだ。……次は姫さまの寝具を）

荷物入れの皮袋から二枚の大きな麻布を取りだす。一枚を地面へ広げ、その上にフェリシアを仰向けに寝かせた。空いた皮袋を丸めて枕代わりにする。もう一枚の布は掛け布団として使う。

「エ……エリス……」

布を姫に掛けようとしたとき、か細い声が聞こえた。エリスは汗ばんだ主の美貌を見つめ、やさしく訊ねる。

「なんでしょう、姫さま」

「お願いが、あります。わたしの、し……下着を、替えてもらえませんか？　わたし、アレが恐くて……今、お股を見ることもできなくて。こんな恥ずかしいこと、エリスにしか頼めません」

フェリシアの目には涙が浮かび、両耳が真っ赤になっていた。

（……下着っ!?　そんなことをしたら、姫さまの裸を……！）

見ることになる。想像しただけで動悸がはやくなった。

「しょ……承知いたしました。では失礼をして、お召し物を――」

ふるえる両手でワンピースの裾を掴み、少女の股間の方へめくっていく。肉付きの浅い白い太ももが現れ、純白のショーツが露わになった。今度はその薄布を握り、ゆっくりとさげる。

（ああっ……！　姫さまぁ……！）

フェリシアの秘処は完全に両性具有になっており、陰毛は一本も生えていない。美しい縦すじが丸見えだ。その間からサーモンピンクの粘膜がわずかに覗いている。問題のペニスはというと、どうやらクリトリスが変質したらしい。女核のあるべき場所から細い肉幹が伸び、美少女のふっくらとした下腹を皮被りの亀頭が叩いている。そして性器の周囲には、植物の蔦のような紋様が赤黒色で刻まれていた。

「エリス……ど、どうなっていますか？　ひどいことに、なっていますか？」

不安げな声だった。女騎士は姫を見つめ返し、元気づけるように明るい声をだす。

「大丈夫です。必ず、カラム殿が姫さまを元に戻してくださいます。さあ、新しい下着を。腰を少しだけ浮かせてください」

フェリシアの荷物から白のショーツを取りだし、丁寧に穿かせた。女性器は隠れたが、勃起した肉棒は小さな布では覆いようもない。それでも、下着を替えてもらったことで不快感が減ったのか、彼女は笑みを浮かべていた。

「ありがとう、エリス。あなたも恥ずかしかったですよね。変なことを頼ん

著者近況　お世話になってます、桃生雨京です。ふたなりもっと書きたいです。いろんなタイプの美少女におちんぽを生やしてやりたいです。

でごめんなさい」
「滅相もございません。姫さまのためならなんでもいたします」
主のワンピースの裾を元に戻し、麻布を彼女の肩へ掛けた。
「寝苦しいでしょうが、どうかお休みください。姫さまのことは、このエリスが全霊をもってお護りいたします」
「ええ……そうさせてもらいます。おやすみなさい、エリス」
ゆっくりと目蓋を閉じるフェリシア。疲労が溜まっていたのか、あるいは騎士に全幅の信頼を寄せているのか、すぐに寝息を立てはじめた。
（おやすみなさい……フェリシア）
姫の眠りを妨げないよう胸中で挨拶を返す。音をださずに立ちあがり、聖域内にある大岩の陰へと移動した。
「うぅッ……くっ！　もうっ、限界だっ……ああッ!!」
股間部の甲冑を外し、地面へと落とす。すると、スカートの中から何かがブルルンッと飛びだした。
（くそぉ、またこんなに大きくっ！）
女騎士の股座から生えていたのは屹立した肉棒だった。十五センチ以上の竿肉に、包皮を剥いだ真っ赤な亀頭、性器を強調するかのように刻まれている淫紋。エリスは誰にも話していないが、フェリシアとほぼ同時期にふたなりの躰になってしまっていたのだ。
（ビクビクと蠢いて気持ち悪いっ！　粘ついた汁が大量に……いやぁッ！）
見たくもない牡棒だが、どうしても目が離せない。
（今日はいつもより硬く、大きくなっているような。なぜだ――あッ！）
エリスは気づく。フェリシアのショーツを握ったままだということに。
（姫さまの……下着。脱いだばかりの……まだあたたかい、ショーツっ）
全身の血流がはやくなり、ふたなりペニスへと集まっていく。
（だ、ダメだダメだっ！　私は何を考えているのだっ！　そんなこと……姫さまへの裏切りだっ！　それにっ、見張りもしなければいけないんだぞっ！）
しかし、穢れた欲望は消えなかった。さっき目にしたフェリシアの愛らしいヴァギナ。対照的なおどろおどろしいペニス。その二つが脳裏にちらついて、エリスから理性を奪っていく。
（す……すぐに済ませれば、問題ないだろうか。こんなにギンギンになっているんだ、ちょっと擦ったら……）
岩の陰から主の方を窺う。彼女は安らかな顔で寝ている。
（申し訳ありません、姫さまっ！　どうか私の愚行をお許しくださいっ！）
高鳴る心音を聞きながら美少女の使用済みショーツを鼻へと押し当てた。
「すぅ……ンっ、はあっ！　ひ、姫さまぁっ……♥」
膣から滲みでた体液は小水と恥垢とが混ざって濃厚なチーズ臭となる。それがエリスの鼻腔を勢いよく突き抜けた。激しい興奮と罪悪感で腰がガクガクと揺れる。
（これがっ、姫さまの恥ずかしいにおいっ！　あぁッ、あんなに可憐なお姿をしているのに、やっぱりここは……くさいっ、くしゃいのぉおっ♥）
それでも汚れた下着から離れようとはしなかった。逆に鼻先をクロッチへ擦りつけ、深呼吸を繰り返し、姫の恥臭を取りこんでいく。
（ダメだぁっ、もう……アレがっ、痛いくらいに硬くなってるっ！　うぅっ、男のこれなんかっ、さわりたくもないのにいぃっ！）
涙を溜めた目で淫棒を見る。胸中は口惜しさと嫌悪感でいっぱいだが、快美への欲望には勝てなかった。カリ首付近を強く握り締める。
「おほおっ……♥　声っ、でちゃうっ。ひぃ……ン♥　手が勝手に……！　いやらしい音っ、響くぅっ♥」
クチュックチュッ、グチュチュッ。亀頭から竿の根元まで激しく扱くと、溢れていたカウパーが淫靡な音楽を奏でた。フェリシアを起こしてしまうのではないかと不安になったが、手はとめられなかった。
「どうして男にはこんな擦るだけで気持ちよくなるモノがついているのだっ！　それがどうしてっ、私にッ！」
男が嫌いだった。否、憎んでいるといっていい。幼少時、一度だけ変質者にイタズラされたことがある。まだふくらんでもいない乳を撫でられ、一本すじを執拗に擦られた。そのときの恐怖、不快感が心の奥底に残っている。
「だからこそっ、男には負けないようっ、一心不乱に剣に打ちこんできたというのにッ！　んぅううっ……♥　私はっ、男のこれにぃいいッ……！」
最初、ふたなり化したときは嘔吐した。汚肉を切り落とそうとも考えた。しかし、クリトリスが変わったものだとわかると、さすがに躊躇せざるを得なかった。幸いなことに普段は甲冑を纏っているため、ペニスのふくらみや勃起は隠すことができた。誰にもばれずに日常生活は送れたが、問題は衣擦れによる刺激だった。ほとんど一日中、淡い肉悦を与えてくるのだ。
「あの晩っ、どうしても寝られなくて、気の迷いでさわってしまった！　たった一度の過ちでっ、私はッ……んひぃッ……♥」
剛直にふれた瞬間、全身にたまらない電流が走った。衝動に任せてカリ首を数度扱いたら、先端の穴からビュルルッと白濁の汁が飛びだした。同時に、意識を失う程の快感を味わった。
「それからは、城の勤めを終えて毎晩毎晩っ……！　男の汚らしい性器など見たくもないのにっ、男の醜い欲求に負けたくないのにっ……！　あああッ……いいのおっ♥」
パンパンに張りつめた肉竿から爆発する精液。その光景、その衝撃、その快感は処女である女騎士を虜にしてしまった。
「姫さまあぁっ！　ごめんなさいいっ！　今日も姫さまのことを考えてっ、

クチュクチュしますぅううっ！　すぅんんっ、はあああッ……♥」
自慰をするとき妄想するのはいつもフェリシアだった。彼女のことを想ってペニスを扱くと、狂ってしまいそうな程気持ちよくなってしまう。さらに今日は美少女の秘部を生で見て、股間を覆っていた下着まで使っているのだ。かつてない昂りと悦楽がエリスを満たしていた。
「ダメぇっ……もうっ、ダメえっ！　どっぴゅんするうっ！　お……おちんぽからどっぴゅんしゅるのおおぉッ♥　姫さまぁっ、姫しゃまあああっ……♥」
ビュルルルルッ、ビュッ、ビュウッ、ドビュウウウッ。朱色に染まった亀頭から白の樹液が噴きだす。牝となった騎士は獣のような声を響かせて、汗ばんだ乳や尻を悩ましくよじる。
「あうぅんんッ♥　とんじゃうぅうッ……でもっ、ダメぇっ！　姫しゃまを護らなくちゃっ！　んふぅんんッ♥」
あまりの快感に意識が遠のいていくが、騎士の矜持がそれを許さない。フェリシアの下着を強く噛み、なんとか正気をもたせた。
（姫さまの味が口の中に広がるっ！　においもいっそう強くなって、頭がクラクラするのおっ♥）
吐精でびくつく躰を大岩に預けた。そのままズリズリと腰を落とし、爪先立ちで男根を突きだす。矢のように飛んでいく牡汁が地面を白く汚していた。
「はあっー……あっ、はぁぁあー……ンっ、あぁ……わ、私ぃ……」
絶頂の波が去り、咥内からショーツが落ちた。唾液にまみれた布地を見て、死にたくなるような後悔に襲われる。両目から涙がポロポロとこぼれた。
「自害などいつだってできる。やるべきことをやらなくては。姫さまを元のお姿に……！」
垂れさがった男根を布で拭い、甲冑を着けなおした。そして、汚れきったフェリシアの下着を両手で拾う。
「ごめんね、フェリシア。私、最低だ」
掠れた声で呟き、ふらつく躰を引き摺って、姫君の下へと戻った。

2

夜明けと共に野営地を後にしたエリスとフェリシアは、一時間も歩かないうちにカラムが住む丸太小屋へと辿りついた。屋根や壁には蔦が伝い、窓ガラスの一部は割れてしまっている。
「姫さま、ここでお待ちください。私がまず、中の様子を見て参りますので」
「……わかりました。お願いします」
小屋の入口に立った女騎士は後ろの姫へと振り返る。彼女は微笑んでいたが、野宿の疲れがやはり残っているらしく、顔色がよくなかった。
（それだけじゃない。姫さまのアソコ……今朝からずっと反り勃ったままだ）
さり気なくフェリシアの股間を見やる。ワンピースが卑猥な形に盛りあがり、小刻みに蠢いていた。
（姫さまだけじゃない……私も、だ。くぅン……♥　先っぽがスカートと甲冑に擦れて……！）
昨晩あれだけ大量に放ったというのに、女騎士のふたなりもビンビンだった。先走りの汁が絶え間なく溢れ、股座は牡のにおいで充満しきっている。
（私はともかく、姫さまをはやく診てもらわねば……！）
ふるえる手で入口のドアを叩いた。
「カラム殿、ご在宅でしょうか？　グランヴィル国騎士団長エリス・バートウィッスルです。王の命を受け、フェリシア姫をお連れしました」
中から返事はなかった。二度三度ノックをしたがやはり同じ。焦れたエリスは、勝手に入ることにした。
「失礼いたしま――」
小屋へ踏みこむと同時に足をとめた。室内の空気が明らかにおかしい。妙に淀んでいるうえ、鼻腔に異臭が入ってきたのだ。
（まさかっ……！）
リビングキッチンを抜け、奥のベッドルームへと駆けた。そこで見たのは想定したとおりの、最悪の光景だった。
「カラム殿っ！」
茶色のローブを着た老魔法使いがうつ伏せになっていた。背中には王紋付きの短剣が刺さっており、大量の血が床へと広がっている。エリスはあたりを警戒しながら膝をついた。
（息はもう……ないか。血が完全に固まっている。王の召喚を受けたのが一週間前。そのときにはすでにカラム殿は……？　いったい誰が――）
「きゃあああああッ!!」
その悲鳴を聞いた瞬間、立ちあがっていた。踵を返し、剣を抜き、小屋の入口へと神速で戻った。
「姫さまっ――なッ!?」
「フフフっ、さすがにおはやいですなエリス殿」
特徴的な粘っこい喋り方をする魔法使い、バルタザルがその場にいた。濃い紫のローブを着ている。彼の毛むくじゃらの手はフェリシアの肩にあった。姫は全身を小刻みにふるわせている。
「バルタザルっ！　貴様……何のつもりだっ！　姫さまから離れろっ！　それに……お前たちもッ！」
そこにいたのは不潔な中年男性だけではなかった。エリスの部下、若い男騎士二人が姫の前に立っている。騎士団長の一喝で怯えた表情をわずかに見せたが、結局、動くことはなかった。
（くそッ！　こいつらなぞ敵ではないというのに、姫さまを人質にとられていては……！　しかし、何故バルタザルがここに――）
切っ先を彼らへ向けたまま沈思するエリス。フェリシアと己のふたなり化、カラム殺害、そしてバルタザルの登場。すべてが一本の糸で繋がった。
「全部、貴様の策略か……！」
苦々しくいい放つと、悪漢は不愉快な笑みを返してきた。謀られたこと、おぞましい呪いをかけてきたこと、そ

…なるほど

この先にいる魔物をわたしに倒してほしいってわけね

それまではわたくしが道案内しますし

貴女にとっても悪い話ではないと…

いいわ一緒に行きましょう

え!?

いいんですか!? そんな…簡単に

あんたに助けてもらったのは事実だしね

借りは返しておくわ

それはそうですが…

…でも

何よ わたしが断ると思ってたの？

それにあなた安全なルート知ってるみたいだしね

わたしも助かるわ

共闘成立! 先に待つものは…

粘獄のリーゼ

淫罪の宿命　第5話　魔を狩る理由

漫画COMIC／楠木(くすのき)りん　原作ORIGINAL／竜胆(りんどう)

…随分来たわよね

ええ ここまでくれば あと少しですわ

!?

きゃあ

光流(みつる)!!

手を…！

ずぶずぶ

イミテイター!!

床に擬態していたんだ

うっ…

ずプ ずプ

ちっ！間に合わない

…まったく

どうして こんな事に なっているんですの!?

うっさいわね！

それもこれも 罠にかかった あんたを助けるため でしょうが！

誰が助けを 求めましたか？

この程度の魔物 内側からでも 一人で簡単に撃破 できましたものを

ちょっと そんな言い方 ないんじゃ ないの！

元はと言えば あんたが…

ビク

リーゼ様 あまり 怒鳴らないで！

息が… うう…っ

…ともかく今は言い争ってる場合じゃないわ
ええ…そうですわね
まずはここから抜け出さないと…
ニュル
やっ…！なんですの!?
ニュル
ぷるっ
むぐ…
ちょっと光流！あんまり動かないでよ
おっ おやめなさい
ニュル
も申し訳ありません触手にくすぐられて…

う…んん…う

リーゼ様この粘液…おかしいですわあ…んっ

ええ…獲物を逃がさない為の…くっ媚薬粘液ね

マズイわこんな所じゃ剣は振れない…ふう…くっ

はぁ…あ光流そんな体を押し付けない…で

リーゼ様こそあ あまり暴れないでください…

くすぐったいです…わっ

鉄拳魔法少女
ブニナ
卑劣な淫魔のふたなりトラップ
魔法少女を快楽チンポ漬とし!!
勝者に与えられた最悪のプレゼント
小説 NOVEL 黒井鶫
挿絵 ILLUSTRATION 俄雨

チュン、チュンチュン――
穏やかに鳥が囀る、いつもと変わりない、穏やかな様相の住宅街――
ドゴォンッ――！
しかし、その静寂を突如として切り裂くような爆発音が、辺りに響き渡る。
「テメっ、このチンポ野郎！　大人しくしろーっ！　ぶちのめしてやるっ！」
そのあとに聞こえてきたのは、口汚ない罵りの言葉だ――しかし、その声はその罵りとは真逆の硝子の鈴を鳴らしたような、澄んだ少女の声であった。
「ホホホ……ずいぶんとお転婆な方ですなぁ……私の攻撃を変身もせずに避けるとは、まるでケダモノのよう」
砂煙の中から、男にしては甲高い声が聞こえ、その声の主の大きな三角帽をかぶったようなシルエットが浮かぶ。
「ハッ！　ケダモノはどっちだこの淫魔！　こんな昼間から女の子を襲うなんざぁ、いい度胸してるじゃねぇか！」
その声の美しさが台無しになるような悪辣な罵り声を発するシルエットは三角帽の影と比べるとあまりに小さい。
――だが突如として、その小さな影から、紫色の光が迸る。どうやら手に握った何かが光り輝いているようだ。
「そんなに変身してほしけりゃ――見せてやる！　『魔法少女』って奴をな！」
その言葉と共に、砂煙が一気に吹き飛んだ。何条もの紫色の閃光がその小さな身体を柔らかく包み込んでいく！
「変っ！　身っ！」
だが同時に、煙が晴れたことで彼女と相対していた大きな三角帽の影が、その醜悪な正体を露わにしていた。
――帽子かと思われた頭の三角形は、なんと赤黒く膨れ上がった顔面だった。
いや、それだけではない。三角形の頂点である頭の先からは粘度のある液体がじわじわと流れ、そのひょろりと長い胴体には幾条もの血管が――
いや、回りくどい表現はやめよう。晴れた煙の中から現れたのは、屹立する男性器に顔を書き込んだような、まるで悪夢を模ったような姿だった。
「ホホホ……では見せてもらいましょうか！　魔法少女の姿とやらを！」
巨大ペニスの挑戦的な言葉に答えるように、紫色の閃光は弾ける。
――そこに立っていたのは身長百五十程度の小柄な少女だった。
彼女は道着と洋装の混ざった不思議なコスチュームを身にまとっている。
紫の衣装布が覆う部分は身体にフィットしているため、十二分に発育したボディラインを強調していた。
だが布地の面積は少なく、覆われてない部分――無駄な肉のないヘソや脇、健康的な肌色が露わになっている。
丈の短いスカートから覗く太腿や、布地に包まれた窮屈そうな豊かな胸が目を引くが、スカートも股間部分のクロッチは隠さないという徹底ぶり。
腰回りにはまるで黒帯のように、紫のリボンが中央で結ばれていた。
例えるなら、巷で言うところの「魔法少女」と呼ばれる類の格好であった。
しかし、アニメに出てくる魔法少女と比べて、その肢体は十二分に発育しており、肉付きのよい豊満な身体が目を引いている。
だが、彼女が只のコスプレ少女でないのは、年端も行かぬ少女とは思えぬ眼光の他にも、衣装と同じ紫色の濃いオーラをまとってることでも明らかだ。
「鉄拳魔法少女ッ！　フミナァッ！」
魔法少女というよりは、特撮ヒーローのような動作と掛け声で、少女――否、鉄拳魔法少女フミナは名乗った。
「魔法少女の使命は、淫魔共を木っ端微塵にぶちのめすことだ！　覚悟ッ！」
目の前の醜悪な淫魔を指さしながら強い意志でもって高らかに宣言するフミナ。その目には決意が宿っていた。
「ホホホ……ホホホホ……」
しかし、そんな少女の力強い淫魔撲滅宣言にも、ペニスじみた淫魔は甲高く笑い声を上げ続けるだけだった。
「ホホホ……私を倒すというのですか？　このムーザムを？　ホ、ホホホホホホ！　なんとまぁ浅はかな！」
ムーザムと名乗った男根の魔物は、肉棒で言うところの雁裏の部分にある目で見下した視線を少女に浴びせた。
「無知な貴方に教えてあげましょう……私の身体は魔法を無効化する魔伝導率が高い組織で構成されており、魔力攻撃では傷一つつけることも――」
高説を垂れ続けようとしたムーザムへ、フミナは素早くステップで距離を詰めた。あっという間に正面へ立つとムーザムの言葉を遮るように――
「覇ァ！」
――正中線に一発、力強くも美しい正拳突きを淫魔に見舞ったのだ。
「グワァーッ！」
くの字に折り曲がった中折れ状態で、ムーザムは勢いよく後ろの壁へとぶつかり、壊れた壁と一緒に崩れ落ちた。
「てて、鉄拳っ！　魔法少女が鉄拳ですとぉ⁉　なんたる魔法少女……否！　本当に魔法少女なのですか貴方はぁ⁉」
今までの余裕ある態度はどこへやら、淫魔は予想外の攻撃に面食らったらしく、慌ただしく矢継ぎ早に捲し立てる。
「――言いてぇことはそれだけか？」
一方のフミナはただ一言だけそう言って、のっしのっしと力強くしおれたペニス淫魔のもとへ歩み寄っていく。
「ヒッ、ヒィッ……！」
少女の放つその凄みに恐れ戦いたムーザム。身体に浮かび上がっていた血管も鳴りを潜め、頭部の三角すら縮みだし、すっかり「萎えて」しまっていた。
そんな哀れな淫魔に対しても、拳を握った魔法少女は油断なくゆっくりとムーザムの方へと近づいてくる。
「や、やめっ」
淫魔の哀れな命乞いを聞く前に一瞬で息を目一杯に吸ってから――
「オララララララララララァ！」
目にも止まらぬ拳の乱打が始まった！　秒間三発以上の怒涛のラッシュ

でムーザムの胴を、顔を、頭を、徹底的に殴る、殴る、殴る、殴る！

「ゴバァァァッ――――！」

口と頭頂部から白濁色の粘つく液体を吐き出しながら、ムーザムは苦悶の叫び声を上げ続ける。そして――

「ウオラァッ！」「ガァーッ！」

最後にまたも強力な正拳突きを食らい、ムーザムは地面に叩きつけられた。

「グ、グォォ……！」

今にも息絶えそうな声を上げながら唸るムーザムにも、フミナは油断することなく残心していた。

だが程なくして、地面に転がっていた淫魔の身体が、一瞬でさらさらと砂のように散り始めた。鉄拳魔法少女の勝利の瞬間であった。

「ハッ！　御大層なこと言ってた割にはずいぶんと呆気なかったな！」

格闘魔法少女は警戒を解いて、しおしおに干からび始めた淫魔を、念のため足蹴にしながら勝利の余韻に浸る。

「ホ……ホホホ……！」

――だが完全敗北したはずのムーザムは何故か不敵な笑みを浮かべていた。

「ホホホ……私を倒しましたね……このムーザムを……ホホホ……！」

フミナが踏みつけていた部分も砂のように崩れ去ったかと思うと、そのまま全てが塵となり、ムーザムだったものは吹いた風に散っていった。

「なんだったんだ……アイツ……？」

その歯応えのなさと散り際の台詞に首を傾げながらも、フミナは奴が襲おうとしていた少女のもとへ向かった。

「！　だっ、大丈夫ですかっ⁉」

彼女は隠れながら油断なく辺りを警戒していたが、変身を解いたフミナの姿が見えた途端、待ちわびていたように慌ててフミナのもとへ駆け寄っていた。

「よ、よかったぁ、無事でっ……！　私の身代わりになっちゃったんじゃないか、って心配で……！」

――どうやら彼女はフミナのことを心配していたらしく、そのまま小柄な少女を抱きしめてきた。フミナはあきれがちに笑いながら握り拳を作る。

「大丈夫か？　あのキモいヤローならアタシがぶん殴っておいたからよ！」

「ぶ、ぶんなっ……⁉」

自分より身長が高い「アレ」を、今抱いている少女がぶん殴ったと聞いて、思わず信じられないといった表情を彼女が見せたことにフミナは気がついた。

「ま、まぁ気にすんなって！　意外に弱っちかったってだけだからさ！」

魔法少女であることを気取られる前に、フミナは抱き着いてきた彼女をなんとか引き剥がしその場を去ろうとする。

「あ、ありがとう！　え、えっと……」

去りゆく少女にお礼を言おうとするも、彼女の名前が分からず言葉に詰まる少女に、フミナは改めて名乗った。

「フミナ――久利（くり）フミナだ」

「あ、ありがとう！　フミナちゃん！」

ちゃん付けで呼ばれ、魔法少女は思わずずっこけた。自分は小柄だが、セーラー服を着た彼女とはそう年齢は変わらないはずなのだが――

「ま、いいか……いつものことだし」

手を振ってくる少女の安堵した顔を見届けて微笑んでから、フミナはいつも通りに、子供の頃から通っている空手道場へと向かっていった。

――だが彼女は気がついていなかった。淫魔の卑劣な企みが、フミナのあずかり知らぬところで進みつつあることを。

※　※　※

ムーザムを打ち滅ぼしたその日の夜。淫魔をぶちのめした達成感に包まれながらフミナは穏やかに眠っている――

「はぁっ……はぁっ……！　あ、ああっ……！　んんっ、う、ううっ……！」

――はずだったのだが、ベッドの所有者である少女は、寝苦しさから不快そうな唸り声をうんうんと上げ続ける。

額には玉の汗をかき、目元は苦悶に歪み、声は聴くだけで息苦しそうだ。

「んふぅっ……！　はぁっ、はぁんっ……あっ、はぁうっ……！」

しかし、その苦痛の声に、段々と艶の色を帯び始める。聞けば思わずドキリとするような、そんな色を――

「はっ、はっ……んあぁっ！　はっ、はっ……な、なんだ……？」

そしてフミナは強烈な違和感からか、とうとう完全に目覚めてしまう。

「どうしたんだ……はぁっ……こんなに眠れないだなんて……」

困惑の感情から吐き出した溜息も、どこか熱を帯びて聞こえてしまう。

「か、身体が……熱い……のか……？　か、風邪でも引いたのか……？」

じっとりと汗ばみ火照る素肌。頭がぼうっとする浮遊感。

「クソっ……アタシの身体……一体どうなって……ひあぁんっ！」

フミナは少し身体をよじっただけなのに、ビリビリと弾けるような快感がその身体を一気に駆け巡ったのだ。

自分の口から出たとは思えぬ愛らしい声に赤面しながらも、フミナは今の痺れるような感覚に戸惑っていた。

「な、なんだっ？　今のっ……⁉」

生まれて初めての感覚がもたらす不安から、思わず目を丸くしてキョロキョロと辺りをうかがってしまうフミナ。

――いや、見るべきは周りではない。見るべきは快感の発生源、乙女の聖域、恥じらいの――自らの股間だ。

「あ、ああっ⁉」

起き上がり毛布をめくって自分の股間を見たフミナは見渡した時以上に目をまん丸にして、その一点を凝視した。

「なっ、なんだっ……これ……？」

なんとそこには乙女の股間にあるはずのない、雄々しいパジャマのズボンの膨らみがあった。

「こ、これって……ま、まさかっ」

性の知識に疎い少女でも気がついた。オトメの股間にはあり得ない「モノ」に、フミナは思わず狼狽えてしまう。

「な、なんでコレがアタシの股にあっ

て、しかも勃起してるんだっ!?」
そんな慌てるフミナに突如聞こえてきたのは、今日聞いた甲高い笑い声！
「ホホホ……ホホホ……！」
その忌々しい笑い声に、思わずフミナは怒りの形相で辺りを探り始める。
「い、一体どこからっ……!?」
どこにいるかはさっぱり分からないが、今の笑い声で自分の身に起きた異変は、あのムーザムとかいうチンポ野郎のせいだと魔法少女は確信する。
「クソっ！　よく分からないけど、とにかく変身しなきゃ、始まらないっ！」
フミナはベッドに仰向けになったまま、常に身に着けているネックレスのアメジストをいつもと同じように握った。
「変身っ……！」
ブワッと宝石から放たれた光が、着ていたパジャマを紫色の光の粒子に分解したと思うと、素早く魔法少女の衣装に変化し、フミナはそれをまとった。
「はぁ、はぁ……っ！　へ、変身できた……けどっ……ううっ！」
紫の光が晴れた時には、ベッドの上には久利フミナではなく、鉄拳魔法少女フミナの姿があった。
――しかし変身前の異変は相変わらずフミナの股間に残り続けたままだ。
黒のパンティーは下腹部との間を不自然なほどに盛り上がらせている。
「んんんっ……！　は、はぁぁ……す、すれるぅっ……！　これ、キツっ……」
今にもはち切れそうなクロッチ部分からは、電流が走るような、いてもたってもいられない刺激が常に襲い掛かってくる。
「と、取らなきゃ……！　刺激強すぎるっ……コレ取らなきゃ――んんっ！」
フミナは一呼吸してから決心して、パンティーに手をかけて、えぇいままよと一気に引きずり下ろした。
「ああっ！　ほ、ほんとに生えてるぅっ……！　ちんぽ、生えちゃってるっ」
そこにはグロテスクで忌々しい肉塔が、天井をも突き破らん勢いで、脈動しながらびくびくといきり立っていた。
「な、なんでこんなに勃起してるんだ……!?　アタシ、女なのにっ……！」
剥きだした内臓本来の色である、先端のピンク色をこれでもかと膨張させながら、さらに先端の小穴から蜜を迸らせるペニスにフミナは困惑した。
「く、クソっ……！　おい！　いるんだろ！　隠れてないで出てきやがれ！」
フミナの頭の中には、今まさに股間に鎮座している違和感そっくりなあの淫魔――自分が滅ぼしたはずのあのムーザムとかいう淫魔の存在があった。
「ヤツだ……！　アイツがアタシにこんなモノをっ……！　魔法少女のアタシにこんなっ……こんなキモいモノを勝手に取りつけるなんて……！」
怒りに震える魔法少女は、この無様な光景を見て笑っているはずのキノコ顔を注意深く探したが、フミナの部屋からはそんな気配すら感じられない。
「くっそう……！　一体どこに――」
『ホホホ……！』「ッ!?」
その時だ。突如としてあの厭味ったらしい笑い声が、フミナの耳に飛び込んできたのである。
「ど、どこだっ！　姿を現せ！」
『ホホホ……！　何を言っているのです？　私はもう貴方の前にしっかりと姿を現しているというのに……』
「何ッ!?」
『ホホホ……ここですよ、ここ……』
声が聞こえてくる方に目を向けるが、そこにはあり得ない異物しかない――と、思ったその瞬間。ドクンと一物が跳ね、表面に何かが浮かび上がった。
「あ、ああっ！」
脈動したペニスに現れたのは――なんと、目と口であった。
「な、なんだこりゃぁっ!?」
そこにいたのはあのムーザムであった。なんの冗談だというのか、淫魔が自身の股間で男性器として生えていたのだ。ムーザムが股間で不敵に笑った。
「おやおや、ようやくお気づきのようですねぇ？　お久しぶり、ホホホ」
「なっ、なぁっ……!?」
あまりのことにフミナは言葉も出ない。無理もない。倒したはずの相手が自分の股間から生えてくるなんてまさか夢にも思わないだろう。
「こっ、こっ、こいつっ……！　ぶっ、ぶん殴るっ！　ぶっ飛ばしてやるっ！」
やっと状況が理解でき、股間に男性器として鎮座する淫魔に対し、顔を真っ赤にして怒りを爆発させたフミナは、片手サイズのムーザムを握り潰す！
むぎゅっ！「っひ、ひぃんっ！」
しかし握った途端になんとも言えない愉悦が、ペニスを中心にぞわぞわと全身に広がって、思わず手を離してしまった。
「ホホホ……お嬢さん？　チンポを触る時はもっと丁寧に触らないと……これは貴方の身体の一部なのですから」
「ふっ、ふざけんな！　お前が勝手にこ、こんな風に……んんっ！」
ムーザムがぶるりと身震いするだけで、フミナは言葉に詰まってしまう。
「ホホホ……このチンポは私の肉体であると同時に貴方のチンポなのです」
ムーザムの諭すような言葉に、口は悪いが純情な魔法少女は歯噛みする。
「クソっ……！　なんだってこんな真似しやがるんだっ……！」
「何故……？　ホホホ！　それはまた分かりきったことを！」
ムーザムはフミナの股間で笑った。
「淫魔というものは快楽に溺れるという本分を果たす女を見ることが何よりも好きな生命体なのですよ！」
変態性癖を高らかに宣言した淫魔を、少女は猛烈に軽蔑する。
「わ、分かっちゃいたが、なんて悪趣味な奴らなんだ……！」
淫魔から女性たちを守る魔法少女は思わず堅く握り拳を作った。あまりに身勝手がすぎる淫魔へのフミナの怒りは、収まる気がしなかった。
「この野郎！　さっさとアタシの身体

著者近刊　『マジカルデュオ　ふたなり快楽に堕ちた魔法少女』（デジタルブレイク限定）　好評発売中！

から出ていけ……っ！」
ギュッと力を込めた握り拳を振りかざし、退去を命じた鉄拳魔法少女だったが、ムーザムは怯えもせずにわざとらしく困った表情を浮かべていた。
「そう言われましても……こうなってしまったら、もう私の裁量ではどうしようもないんですよねぇ……」
そう言って困り顔だったペニスは、ニヤリと不敵な笑みを浮かべた。
「私を引き剥がす方法はただ一つ――貴方が自分でこのいきり立ったチンポを鎮めるしかないのです！」
フミナはその提案を聞いてから、数瞬の間を置いた後、一気に赤面する。
「はぁ⁉　だ、誰がそんなっ……！」
「そう難しく考える必要はありません……いつもと同じように性的に興奮したから、オナニーする感覚で――」
「つざっけんな！」
あまりにふざけた提案に、自分の身体の一部になってしまっていることを忘れ、目の前で勃起する淫魔に、思わず一撃食らわせてしまった。
ぬるぅっ――「あうぅっ！」
しかしその攻撃はペニスの先端から分泌される粘液のぬめりのせいで致命的なものにはならず、逆に快感を生む結果となってしまった。
「ホホホ……言ったでしょう？　私を絶頂させない限り、貴方はいつまでもチンポをぶら下げたふたなり女だと」
「っく……！　ま、マジかよっ……！」
勃起が治まる気配もなく、股間は疼き続けるまま。快感を待ちわびたペニスとしてぴくぴくと震えながら、少女に屈辱の自慰行為を促すムーザム。
「扱くしか……ないのかっ……！」
このままでは、普段の生活なんてできようはずもない――フミナは意を決して恐る恐るペニスに触れようとする。
（ど、どこをどうすればいいんだ……？　こ、この頭の部分か……？）
淫魔との戦いでも負け知らずな魔法少女であり、恋愛とは縁遠い少女は、勃起した男性器をこんなに間近で見たことなどなかった。
「よ、よし……！」
フミナは恐る恐る、赤く膨張した部分をゆっくりと指先で触れる。
「んうぅぅっ⁉」
指先がちょんと触れた瞬間、痛みにも似た感覚が襲い、手淫初体験の少女は思わず手を引いてしまった。
（な、なんだったんだ、今の……⁉　き、気持ちよかったのか……⁉）
強すぎる快楽に、少女の脳は快楽と判断できなかったらしい。しかし、なんとかして自慰をしなければならないフミナは慣れるため、指で触れ続ける。
ちょんっ……ちょんっ……。
「あっ……！　ぅあっ……！」
そんなふうに恐る恐る、自慰行為にも満たない触れ合いを続けるフミナに、当のペニス本人は不満げに呟く。
「ホホホ……なんと初々しい……しかし、その調子ではいつまで経ってもイけそうにありませんねぇ……では、私の言う通りにオナニーしてみなさい」
「は、はぁ⁉　な、なんでお前の言う通りなんかに……！」
突然の無茶な指示に当然フミナは反発するが、ムーザムはフミナの股間で不敵に笑い続けていた。
「ホホホ、ペニスをいつまでもぶら下げていたいなら別にいいのですが……」
「……くそっ、覚えてろよ……！」
背に腹はかえられない。不本意だがフミナはムーザムに従うことにした。
「では亀頭の、傘の下部分を握ってみなさい……そう、そうです……」
ペニス自身が言う通りに、フミナはその柔らかな指先で、ためらいがちに雁首のやや下辺りを握る。
「んんぅっ……！」
――たったそれだけのことなのに、フミナは全身が怖気だつような快感を覚える。ペニスの先端から蜜が迸った。
「次は上下に扱きなさい」
促されるままにフミナは握った手をスライドさせていく。
「上下に……うぁっ、ああぁっ！」
ずるりと擦れた感触と同時に、男根からは電流のような快感が産まれ、乙女は思わず上ずったような声を上げた。
（な、なんだこれっ、スゴっ……！）
快感に飲まれかけたフミナだったが、ハッと現状に気づいて顔をぶるぶると横に振る。これでは淫魔の思うつぼだ。
（こ、これは仕方なくだ……この忌々しいチンポを取り除くために――）
フミナは自分自身を見失わないように気をつけながら、射精という目標に向かって手淫を続けていく。
しゅっしゅっしゅっしゅっ……！
「はっ、はっ、はっ、あぁっ……！」
ペニスを追い出すことだけを一心に思い、男の自慰行為を続けるフミナ。射精の瞬間が近づきつつあるのか、吐息に艶が、表情に紅が差し始めた。
「ホホホ……なかなか心地よさそうですねぇ……扱くスピードも段々速くなっていますし――」
扱かれている男根は、震えながらフミナの表情を見上げて愉悦に顔を歪ませている。フミナはそれを睨みつけた。
「う、うるせぇ……！　さっさとイって、こいつを……はぁんっ……！」
しかし、自慰による快感のせいか、いまいち迫力に欠ける――否、それどころか淫靡な視線になってしまう。
（ああっ、ダメだ……！　ちんぽ、気持ちいいっ……！　ちんぽコキっ、やめられないっ……！　とまらないっ！）
女の子のじわじわと快感が広がっていくオナニーとは違う、快感を無理やり引きずり出すようなオナニーに、フミナの手は加速していく。
（だ、だめなのにっ！　きもちよくなっちゃだめなのにぃっ……！）
ムーザムの策略に乗せられていると気がつきながらも、少女は既に扱くことを止められずにいたのだ。
「あっ、で、でるっ、でちゃうっ……！」
そしてとうとうその時が訪れようとしていた。尿意にも似た、しかしそれ

聖王と一将軍――
絶対権力の前になすすべなく
思い人を奪われてしまう!
魔剣士リネ2
乙女穢されし戦場
【第9話】聖王は高らかに勝ち誇る
原作／まくらカバーソフト
小説 NOVEL／酒井仁（さかい ひとし）
挿絵 ILLUSTRATION／桐島サトシ（きりしま）

1

「リーネさま、いまです！」
セリアを中心とした弓隊の先制攻撃の後、先陣を切って敵将に斬りかかっていったのはエルヴィン。
将軍アレスの片腕として陰に日向に活躍する副官だが、その剣の腕もまたたしかである。
「ぐぇえあぉおおおお！」
エルヴィンの一撃をくらったヒッピアの将が獣のように吠える。
その隙をついて、ツインテールの美少女剣士が渾身の聖剣技を放った。
「セイクリッド・フォールッ！」
邪を浄化する清浄な光が敵将の身体を貫くと、その身体から不気味な黒い霧が立ち上るのを、エルヴィンも兵士たちもたしかに見た。
倒れ伏すその肉体はみるみる朽ち果て、後には脚絆が残された。
「やはりこいつもカシムと同じか」
アレスが魔武具と共にダイヤモンドシティに帰還してはや数週間。
その間もヒッピア軍は幾度となく侵略の手を伸ばしてきたが、増援を得たハイランド軍の前に、ヒッピア軍の勢力は日に日に弱まっていた。
そんな折、少数の兵を引き連れたヒッピアの将軍が、悪魔の形相で襲撃を仕掛けてきたのだ。
「リーネさま、やはりヒッピアの背後には魔族がいるのでしょうか」
「……ヒッピア軍が勝ち目の薄い戦いを執拗に仕掛けてくるのは、彼ら自身魔族に脅かされているのかもしれないわ。ミュリエル、魔武具の封印はできるかしら？」
「わ、私の魔法では仮封印どまりですが、運搬は可能です」
優秀な僧侶であるミュリエルでさえ、魔武具を解呪するのは難しいようだ。
リーネ自身も聖剣を振るうほどの高いマナを持っているが、もっぱらその力は戦闘において発揮される。アウラ神国の神官長ワインバーグのように、解呪はできそうにない。
「リーネさま、このところずっと戦闘続きでしょう。魔武具を王都に届けるついでに、一度休息なさっては」
「あたしは……そうね、悪いけれどそうさせてもらうわ」
戦闘に勝利したばかりだというのに、リーネの顔は浮かない。
魔武具の運搬を兵士に指示するリーネの後ろ姿を、エルヴィンとミュリエルは心配げに見つめる。
「リーネさま……」
同じ女性として、いや同じ女性だからこそ、ミュリエルはリーネにかける言葉をもたなかった。
前回の戦闘で、リーネはアレスたちの目の前で捕らえられ、魔の力を宿したカシムに犯された。
そのとき、リーネは自身がすでにバロックに処女を捧げたことを告白したのだ。あれ以来、アレスとリーネは言葉をかわしていない。
（王都にはアレスがいる。けどあたしは……どんな顔をしてアレスに会えばいいというの……）
一方そのころ。ダイヤモンドシティの後宮では、聖王バロックが側近からの報告を受け、渋面をしていた。
「……以上、報告にある通り、民のアレス将軍に対する人気は、相当に高まっております、聖王陛下」
「うむ、もう下がってよいぞ」
退席する側近の男の目には、眼前で繰り広げられている異様な光景など見えていないようだった。
側近は長年バロックに仕えているが、その振る舞いにバロックの妹クロエは不審を感じていた。
以前からバロックに忠実な家臣ではあるが、最近の彼は物腰がどこか非人間的に感じられるのだ。
クロエは何度か側近の異変を兄に具申していたが、バロックにとって何より大事なのは後宮、そしてそこで自分の種を仕込む娘。
たかが側近の異変など大した問題ではない。
それより、彼より若く武功をあげている若き将軍が、民の間で人気だということに不愉快を覚えていた。
「若き将軍、常勝の英雄アレスか。ふん、武勲だけが取り柄の若造めが調子に乗りおって」
憎々しげに唇を曲げると、玉座に座ったバロックは傍らの美少女を抱き寄せる。
青い髪の少女は顔立ちこそあどけないが、剥きだしの乳房は豊満で、ニップルは美しいピンク色。
バロックの大きな手が肉球を揉みしだくと「あん」と甘い声を漏らす。
「聖王陛下ったら怖いお顔……私たちがお慰めいたしますわ」
そう言うとアウラの聖巫女は中年男の二の腕に乳房を押しつけ、頬にキスをする。
その慈愛に満ちた仕草にバロックはたちまちやにさがり、シンシアの股間に指を潜らせ、くちゅくちゅと乙女の穴をかき回す。
「むふふふ、もうこんなに濡らしておるのか。お前もすっかりスケベな身体になったな、シンシア」
「だってバロックさまのおちんぽが気持ちよすぎるから……マリオンちゃんも、イキすぎてあの通りですわ」
淫蕩な笑みを浮かべるシンシアに、バロックは満足げに頷き、もう片方の腕で膝の上の少女を抱き寄せる。挿入が深まり、シンシアの親友である少女マリオンが微かに呻く。
「ぁ……ぅ……」
だが、その目はうつろで、手足にも力が入っていない。
精力絶倫、なんど射精しても萎えることもないバロックに、朝から数時間近く犯され続け、もうよがり声を上げる体力も残っていないのだ。
（このままアレスを放置しておけば、

やつとてよからぬ野心を抱くやもしれぬな）

それにアレスには「前科」があるとバロックは聞かされていた。

グスタフ王は聖王の血族でもない、そのうえ野心を持った愚王だった。私腹をこやし、自らの権勢を広げようと、同盟国に攻め入ろうとしていた愚かな男だったが、アレスはそのグスタフ王の子飼いであった騎士オーウェンに剣を向け、国を出奔し、ルートヴィッヒと出会ったのだ。

（いちど裏切った男が、再び裏切らないという保証はない。ここは一つ、一介の将軍にすぎない己の立場を思い知らせておく必要があるか……）

そんな考えを巡らせつつ、バロックはシンシアと舌を絡めながら股間を指で弄り、さらにマリオンを激しく突き上げる。

「あぁバロックさまぁ。シンシアにもまたいっぱいおまんこしていただきたいですぅ～」

「よしよし、もう一発この娘に中出ししたら、お前を可愛がってやるぞシンシア。そら、いくぞっ」

「ぁ……う、ぁ……っ」

下腹部が歪むほどの突き上げに、マリオンが力なく呻く。

「い……やぁ……また中で出されたら、もう頭と、お股がぐちゃぐちゃになっちゃうぅ……」

「よしよし、そのまま我がマラでイキ狂うがよい！」

ぶるっとバロックが腰を震わせると同時に、少女の股間からどろりと濃厚な白濁液が噴きこぼれた。

と同時に、がくりとマリオンがうなだれ、どうやらアクメのために気を失ったようだった。

「ふふ、いくら武将とはいえ、王族でもない娘に我が聖なる子種は刺激が強すぎるようだな」

「そうですね……私もいずれ聖王陛下のお子を宿すわけですし、マリオンちゃん一人に負担を押しつけたら、本当に壊れてしまうかも」

だらしなくよだれを垂れ流す幼馴染の唇を、水色の髪の美少女が愛おしげになぞる。

「なに、手はすでに打ってある。お前たちは我が世継ぎを孕むことだけ考えていればよいのだ」

「はい。聖王陛下の仰せのままに」

シンシアを抱き寄せながら、バロックは新たな騎士団について思いを馳せる。

「黄金の騎士団」と命名される予定のその騎士団は、完全にバロックの直属であり、アレスの指揮系統には属していない。

そしてその役割は、王族以外の貴族の娘、いや見目麗しい娘であれば容赦なく後宮入りを強制――いや、偉大なる聖王の世継ぎを産むという栄誉を与えること。

言ってみれば「娘狩り」のためだけの騎士団であるということを、シンシアたちはまったく知らされていなかったのだ。

2

「うむ……これは私の聖魔法では無理かもしれません、リーネ女王」

脚絆の魔武具をワインバーグのもとに届けたリーネだが、アウラ神国の神官長の返事は思わしくなかった。

「アウラの神官長でも解呪できないなんて、どうすればいいの？」

「どうやら魔武具の魔力属性は微妙に異なっているようです。この脚絆から感じられるのは氷のマナ。ヘスティア公国のベアトリス女王の魔法であれば、あるいは」

ヘスティアの女王ベアトリスは氷系魔法の達人と聞く。

しかし、そのベアトリスはずっと後宮に詰めているはず。

自分が後宮を離れている間、そこでどんな淫らなことが繰り返されているのか……リーネは、いま後宮に足を向ける気にならなかった。

（仕方ないわ、使いの者をやって、ベアトリスにはあたしの部屋に来てもらおう）

幸い、リーネの送った者はすぐ後宮に通された。

ベアトリスからは「私の力でよければ喜んで協力させていただきます」という返事がきたので、リーネはホッと胸を撫で下ろす。

いまだ自分がバロックに処女を奪われたことにわだかまりを感じているリーネと違い、ベアトリスや魔導少女たちはすっかりバロックに身も心も委ねている。

それはわかっているつもりだったが、久しぶりにベアトリスと再会したリーネは、その姿に息を呑んだ。

「ベアトリス……あなた、そ、そのお腹は、まさか」

なんと少女の下腹部はふっくらと丸みを帯び、明らかに妊婦腹となっていたのだ。

よく見れば、緑の強化服ドレスも腹部を締めつけないマタニティ仕様となっている。

「ふふふ、素敵でしょう。もちろん聖王陛下の赤ちゃんよ」

そう言って愛おしげに腹をさする。

ベアトリスがいつに種付けされたのか知らないが、赤子の発育が早すぎるのではないだろうか。

リーネの疑問に、ベアトリスは聖母の笑みを浮かべる。

「聖王陛下の側近の方が、異国の薬をくださったのよ。一人でも多く陛下のお子を産めるように、赤ちゃんの発育を促進するんですって」

その言葉に、ハッとリーネは自らの腹部に手を当てる。他人事ではない、自分もいずれベアトリスのようになるということだ。

（いえ、もうすでにあたしのお腹にもあの男の赤ちゃんが）

妊娠の兆候はまだ見られないが、妊

著者近況　今回はNTR増量……でしょうか。しかし、バロックさんってそれほど悪人でもないし、私そんなに嫌いじゃないんですよねえ。まあドスケベ大王、いや聖王なんですが。まあそんなもんだって！（なにが）

娠してもおかしくないほど、リーネはバロックに犯され、子種を仕込まれてしまったのだ。

顔色を失うリーネの様子にも気づかず、ベアトリスは夢見るような面持ちで目を潤ませる。

「あぁ、早くこの子を産んで、二人目のお子を仕込んでいただかないと。貴女も楽しみでしょう、ふふふ」

「あ、あたしは……そんなの」

だがリーネが処女を奪われ、バロックの精液をたっぷりと中出しされたのは事実。

あの絶倫の中年男に孕まされたかもしれないという現実を前にリーネの膝ががくがく震える。

「なにも恐れることはないの。私たちはただ聖王さまの子種を授かって、お世継ぎを産めばいいの。それが私たちに与えられた崇高な使命」

ベアトリスの手がリーネの肩にかかり、そっとベッドに横たえさせる。

抵抗しようにも、ベアトリスの妊婦腹から目が離せない。リーネは仰向けに寝かしつけられ、強化服の上から乳房を揉まれた。

「あっ」

「貴女のおっぱいはまだ少し控え目だけど、心配はいらないわ。妊娠すればおっぱいも大きくなるのよ、赤ちゃんにお乳をあげるためにね」

細い指がゆっくりと強化服を剥ぎ取っていくのを、リーネはただ見ていることしかできない。

「おっぱいだけではないわ、太腿やお尻ももっと丸みを帯びて、母親の身体になっていくのよ」

たおやかな腕の動きと共に、リーネの引き締まった太腿が付け根近くまで露わになっていく。

「あっ」

今はまだ少年のような硬さを持った少女の腰付きも、バロックの子を孕めば女らしさを増していくだろう。それは女の肉体というものなのだ。

リーネ自身の感情はどうあれ、乙女の肉体は一人前の女として成熟し、子を為せるようにできている。

それも、そう遠くない未来、リーネの腹もベアトリスのように大きく膨らんでいくだろう。

「あ、あたしは」

「あなたもせっかく前線から帰ってきたんですもの。一日も早く聖王さまのお子を孕むために、何度もバロックさまの子種を授かるといいですわ」

そうだ、後宮とはまさにそのために存在するもの。

そしてハイランドの同盟国の女王であるベアトリスやリーネ、シンシアが聖王の血を継いだ子を産むのは皆が望んでいること。

「そ、そういえばシンシアは……あの子の傍にはマリオンとかいう娘がいたでしょう」

ああ、とベアトリスは思いだしたように遠い目をする。

「あのマリオンという娘はとても幸運な娘でしたわ」

「ど、どういうこと？」

マリオンとはそう多く言葉を交わしたわけではないが、その勝気で男勝りな性格が、リーネは決して嫌いではなかった。

「彼女は王族ではないにもかかわらず、バロックさまの寵愛を受けて、子種を注がれましたのよ。幼馴染のそんな姿を見ていまじゃシンシアさんも……うふふふ」

ベアトリスの言葉を、リーネは信じられぬ思いで聞いていた。

少女武将であり、シンシアの幼馴染であるというマリオン。

彼女は、たとえ聖王といえどアウラの聖巫女に軽々しく手を出すことは許されない、とバロックのいやらしい誘いをすべてはねつけていたはず。

「う、うそ……でしょう。あのシンシアが」

「嘘ではありませんわ。あのおっとりとしたシンシアさんが、いまでは自分からバロックさまのおちんぽをおねだりするまでになったんですもの」

正直、リーネにはシンシアが籠絡された理由が分かるような気がした。

バロックと言う男はただ好色なだけの男ではない。その絶倫さ、女を強く引きつける「牡」としての魅力は、なによりリーネ自身が身をもって体験している。

（あの信じられない大きさと硬さ、それに強烈な臭いを嗅いだだけで、どんな娘だってきっと抵抗できない）

いまもバロックと淫らな密儀に耽っているかもしれないシンシアのことを妄想する間にも、ベアトリスの指は少しずつリーネの強化服を剥ぎ取っていった。

ピンク色にぬめった舌がリーネの頬を這いまわると、むせ返るような女の香りに包まれる。

（でもあたしは……あたしは……！）

たとえ身体は逆らえなくとも、心までは、この魂まで売り渡した覚えはない。

いかに聖王の世継ぎ作りが大事なお役目とはいえ、ハイランドはまだ侵略の危機に晒されているのだ。

（あたしだけは、バロックになんか屈したりしない！）

心に堅く誓う少女の顔が、こみ上げる愉悦に歪む。

ベアトリスの指が、下着の上から敏感な部分を的確に探り当て、刺激していたのだ。

「ちょ、ちょっと待っ……あんっ」

「どうしたんですの、貴女ももうずいぶん聖王陛下に抱かれていないのではなくて？　早く陛下の子種を注がれたい気持ちはわかりますが、今日のところは私と……」

この少女は、以前からこんなに淫蕩な笑みを浮かべる娘だったろうか。

たしかにリーネはストームランス、ベアトリスはヘスティア国の女王として、互いに同盟国の指導者としての交

著者近刊　『魔法少女W調教　フレイア&クリスタ』『引きこもり勇者のために美少女パーティーが一肌脱ぐようです』『乙女騎士団が隊の存続のために枕営業するようです』『お兄ちゃんが大好きな妹は実は「プロの妹」だったようです』　好評発売中！

流はあった。
それでもまさかベアトリスと肌を重ねるとは夢にも思わなかった。ベアトリスに上品で清楚な印象しかなかったリーネは、ただベアトリスの変貌に驚かされる。
それとも、男の子を宿した女はみなこんなふうになるのだろうか。
「あら、どうしてそんな浮かない顔をなさってるのかしら。もしやとは思いますが、バロックさま以外の殿方が気になっているとか？」
脳裏に浮かんだ若き将軍の顔を直ちに打ち消す。
しかしベアトリスはリーネの心のうちなどすべてお見通しであるかのように、頬ずりをし、柔らかな乙女の耳たぶに軽く歯を立てる。
「んんっ」
「私たちはまだ若いのですから、同じ年ごろの殿方が気になってしまうのは無理ありませんわ」
「ち、ちが」
「ましてや貴女は剣の国、ストームランスのリーネ女王……共に剣を取り、背中を預け合える方を大切に思うのは当然でしょう」
リーネはそれを否定することも肯定することもできず、ただベアトリスの愛撫に身を任せる。
細やかな指の動きに翻弄されたクリトリスが硬くしこり、肉襞の奥からはしっとりとした蜜液が滲んで下着に染みを作っている。
これは、断じてバロックに抱かれたくて反応しているわけではない。
「けれどお忘れになってはいけませんわ。貴女も私も、国を背負う立場の人間、王族なのだということを」
「……」
「あなたがどれほどアレスさんのことを深く思おうとも、彼はハイランドの将軍であり、貴女はストームランスの女王にして、聖王陛下の世継ぎを産まなければならない立場」
「……そ、そんなこと、わかってる……わ」
「あなたも覚えてらっしゃるでしょう、ルートヴィッヒさまが無残に闇討ちされたときの絶望感を」
もちろん、忘れるわけがない。
卑劣なだまし討ちに遭い、鮮血を流しながらアレスの腕の中で息絶えた、高潔なる聖王。
あのとき自分がルートヴィッヒの身代わりになれたら――あの場にいた誰もがそう思ったことだろう。
「そして、ルートヴィッヒさまの御子息までもがヒッピアの策謀で命を落とした時の悲しみを。マルティナさまが後宮でメイドとなったのも、きっとその悲しみを忘れるため」
ベアトリスは、ことさらにリーネを責めたりはしなかった。
ただこの狡猾な少女はリーネの女王としての責任感と、アレスとの立場の違い、聖王の血筋を残すことの重要性を滔々と語った。
そうすることでリーネの心をがんじがらめにしているのが、よもやバロックの入れ知恵であるなどとは、夢にも思っていなかったのだ。
『よいかベアトリス。あのはねっ返り娘はまだ聖王の種を授かることの重要性を理解しておらぬ。前線で勇ましく剣を振るうことで、己の責務から目をそらしているのだ』
（あたしは、アレスのこと大事に思ってる。ただの盟友、戦友以上だと思ってる。けれど、あたしはストームランスの女王である以上、バロックさまの子を孕まないといけない……）
感情と責任感の板挟みの中で、少女の脳裏に鮮やかに思い出されるのは、バロックに処女を奪われたときのことだ。
最初はアレスたちのため、前線の兵士のための物資や増援を送るためにやむを得ず。
けれど、思いだされるのはバロックの男根の強烈な臭い。子宮から逆流するほど大量に、力強く膣内に打ち込まれる、精液の熱さ。
「それともアレス将軍には、もうご自分の気持ちを？　女王としてではなく、一人の女としてお慕いしていると告白されたのかしら」
「そ、そんなことっ」
初々しく顔を赤らめる少女を優しく抱きしめ、ベアトリスはリーネの額に口づけをする。
「なら貴女のここは、まだ聖王陛下のおちんぽしかご存じないのね、よかったわ」
そう言いながら平らな腹を撫でさすられると、ここにあの中年男の子種を注がれたときの快感が甦る。
頭では拒否しているのに、あのとき自分の身体はむしろ悦んでいた。
何度射精しても萎えることのない、バロックの陰茎の逞しさに圧倒され、気がつけばリーネは自分から舌を突き出し、「もっと、もっと聖王さまのおちんぽほしいですっ」と口走っていたではないか。
あのときと同じ、いやそれ以上にリーネの子宮は熱く疼いていた。
「それに、大丈夫ですわ、私もシンシアさんもいるんですもの。聖王陛下のお世継ぎを一回か二回産み落とせば、貴女のお役目も無事終了、それでこの国も……いえ、この大陸全土に平和が訪れるのです」
「この大陸に、平和が……みんなの待ち望んだ世界が」
「ええ」
すでにバロックの世継ぎを孕んだ体現者たるベアトリスの言葉に、リーネの理性はゆっくりと、静かに麻痺していく。
（そうか……一人でも二人でも、バロックさまの世継ぎを産めばいいんだ。そうすればストームランス女王としての責任はとったことになるんだ）
なお優しく下腹を撫でるベアトリスの手つきはどこまでも優しく、リーネ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
©KILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/